

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第87輯

三軒屋遺跡Ⅱ

府営水質障害対策事業に伴う発掘調査報告書



1994

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第87輯

三軒屋遺跡Ⅱ

府営水質障害対策事業に伴う発掘調査報告書



1 9 9 4

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

平成6年9月4日、関西国際空港が日本初の24時間空港として誕生いたしました。開港によって、大阪のみならず近畿一円にとって、いろいろな分野における大きな変化をもたらすことでしょう。この空港の建設にともなう各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査機関として、本協会が設立されて今年で10周年を迎えることとなります。

関西国際空港が所在する和泉地域南部には、広い田園地帯が今なお存在し大阪近郊の農業生産の基盤を形成しております。しかし一面では、この地域の農業用水の水質の保全が懸念されることも事実で、大阪近郊ならではの現実といえます。そこで、大阪府泉州耕地事務所によって、関西国際空港の関連事業の一環として、農道内に用水管（パイプライン）を埋設するという対策が計画されています。

このたび報告いたします泉佐野市の三軒屋遺跡は、現在も整然と条里地割りをとどめる耕地下に眠る広大な面積をもつ、旧石器時代から中・近世におよぶ複合遺跡として広く知られています。埋管部を対象とした幅の狭い発掘調査ではありましたが、縄文時代晩期から中・近世にいたる、過去の人々の多くの痕跡を発見できました。ことに、和泉地域における農耕文化の開始期にかかわる縄文時代終末～弥生時代初頭の資料を得ることができた点や、時代ごとの土地利用のあり方を一定程度明らかにできた点は、今回の成果としてあげることができます。

この事業が、水質保全ひいては田園地帯の自然的・歴史的環境の保全として結実することを願うとともに、本調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府泉州耕地事務所、泉佐野市教育委員会をはじめとする多くの関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後とも本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

平成6年10月31日

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 岩井 幹郎

例 言

1. 本書は大阪府営水質障害対策事業予定地内に所在する、泉佐野市三軒屋遺跡の1993年度発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府泉州耕地事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課調査第一係第1班技師秋山浩三が担当し、1993年11月1日から調査に着手し、1994年3月31日に終了した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府泉州耕地事務所、泉佐野市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。
5. 調査および報告書作成にあたって、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、泉佐野市教育委員会鈴木陽一氏、同中岡勝氏、泉南市教育委員会仮屋喜一郎氏、同岡田直樹氏、および本協会職員の各氏からご指導、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。
6. 現地調査は原則として、本協会が統一して実施している国土座標第Ⅵ系を基準にした4mメッシュの地区割りをおこなって進めた。またこれとは別に、調査の実態に即して調査区を第1区～第4区、および第1-a～第1-k区、第2-a区～第2-j区、第3-a区～第3-e区、第4-a区～第4-j区に分ける呼称も用いた。4m区画の呼称、便宜的に用いた調査区区分、本文中の記号等については、第Ⅲ章第1節に一括して示した。また、本文、挿図中に用いた方位は座標北を示し、標高は東京湾標準潮位の海拔高(T.P.)を用いた。
7. 本書で用いた土層の色調は『新版標準土色帳』7版(1987年1月)によった。
8. 遺構写真は調査担当者ほか、航空写真は富士測量株式会社、遺物写真は小倉勝氏の撮影による。遺物写真のうち俯瞰図版は約1/2の縮尺に統一している。
9. 本調査では、土層中花粉の委託分析を実施した。その結果は、付論として本書末に収録した。
10. 付論以外の本書の挿図・図版作成、本文執筆、編集は、秋山浩三が担当した。

目 次

序 文
例 言

本 文 目 次

第 I 章 調査にいたる経緯	1
第 II 章 地理的・歴史的環境	2
第 III 章 調査の成果	
第 1 節 調査の方法と経過	7
第 2 節 基本層序	10
第 3 節 検出遺構と遺物出土状況	13
(1) 第 1 区	
(2) 第 2 区	
(3) 第 3 区	
(4) 第 4 区	
第 4 節 出土遺物	31
(1) 遺構出土	
(2) 包含層ほか出土	
第 IV 章 まとめ	45
註	46
付論：三軒屋遺跡発掘調査にともなう花粉分析	
川崎地質株式会社（渡辺正巳）	57
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	調査地と周辺遺跡分布図	3
第2図	周辺地形分類図	4
第3図	地区割り方法図	8
第4図	調査区配置図	9
第5図	基本層序断面図	11
第6図	遺構配置図	15・16
第7図	第1区遺構実測図	18
第8図	第2区遺構実測図	19
第9図	第3区遺構実測図	20
第10図	第4区遺構実測図	21
第11図	溝113・114・202～204-OS実測図	22
第12図	第1区主要遺構断面図	23
第13図	第2・第3区主要遺構断面図	27
第14図	第4区主要遺構断面図	30
第15図	遺物実測図・拓影－1（第1区遺構出土）	33
第16図	遺物実測図・拓影－2（第2～第4区遺構出土）	37
第17図	遺物実測図・拓影－3（各区中世包含層出土）	39
第18図	遺物実測図・拓影－4（各区その他出土）	43
第19図	花粉分析試料採取地点	57
第20図	花粉分析フローチャート	58
第21図	花粉ダイアグラム－1	59
第22図	花粉ダイアグラム－2	60

表 目 次

第1表	遺構面および砂礫層上面レベル一覧表	12
第2表	出土遺物観察表	50

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 調査地全景 (航空写真・東から) (2) 調査地全景 (北北西から)
- 図版 2 (1) 第 1 区調査前風景 (北から) (2) 第 2 区調査前風景 (西から)
(3) 第 3 区調査前風景 (南から) (4) 第 4 区調査前風景 (東から)
- 図版 3 (1) 第 1 区全景 (南から) (2) 第 1 区全景 (北から)
- 図版 4 (1) 第 2 区全景 (西から) (2) 第 2 区全景 (東から)
- 図版 5 (1) 第 3 区全景 (南から) (2) 第 3 区全景 (北から)
- 図版 6 (1) 第 4 区全景 (東から) (2) 第 4 区全景 (西から)
- 図版 7 (1) 第 1-a・b 区: 流路115-OR (南東から) (2) 第 1-j 区: 落ち込み
状遺構108-OX (南から)
- 図版 8 (1) 第 1-k 区: 溝113・114-OS (北西から) (2) 第 2-a 区: 溝202~204
-OS (西から)
- 図版 9 (1) 第 2-e 区: 溝206-OS・土壙208-OOほか (南西から) (2) 第 2-g 区:
土壙213-OOほか (東から)
- 図版10 (1) 第 3-c 区: 流路302-OR (北から) (2) 第 4-c 区: 流路403-OR (西
から)
- 図版11 (1) 第 4-c 区: 流路403-OR調査風景 (東から) (2) 第 4-c 区: 流路403
-OR遺物出土状況 (東から)
- 図版12 (1) 第 1・第 4 区遺構出土遺物 (2) 第 1 区遺構出土遺物
- 図版13 (1) 第 2~第 4 区遺構出土遺物 (2) 第 4 区遺構出土遺物
- 図版14 (1) 第 1 区中世包含層出土遺物 (2) 第 2・第 3 区中世包含層・各区その他
出土遺物

第 I 章 調査にいたる経緯

三軒屋遺跡は、大阪府南部、和泉地域の泉佐野市長滝ほかに所在する^(註1)。

本遺跡は、1970年に J R 阪和線長滝駅の西約300mの府道地内工事中に、弥生土器が検出されたことが契機となって初めて周知されるようになった。その後の1971年の市民団体による発掘調査以降、地元の泉佐野市教育委員会を中心として大阪府教育委員会や本協会による、小面積が多いながらも数次の発掘・立会調査が実施されている。それらの成果によって、旧石器時代、縄文後期～近世にいたる複合遺跡であることがあきらかにされ、和泉地域を代表する遺跡として知られる。

現在では、長滝駅および J R 日根野車両基地の南西部一帯の、南北・東西約1.3kmの広大な面積が遺跡範囲として認識されている。この範囲の大部分は泉佐野市域に含まれるが、ごく一部は西接する泉南市域にもおよぶ。また過半は、現在なお整然と条里地割りをとどめる水田・畑地帯として営まれており、大阪近郊における農業生産の基盤を形成している。

さて、この田園地帯の農業用水のほとんどは、高所部に散在する溜め池に依存する。しかし現状では、農地を流れる用水路には、周辺地域の一般家庭排水のみならず工場からの汚水もが流入し、農業用水の汚染が問題になってきた。加えて、農業用水の導水計画の合理化という検討課題も関連し、大阪府泉州耕地事務所では、関西国際空港の関連事業の一環として、この地域の府営水質障害対策事業を計画された。本事業は、耕作地帯内の農道内にパイプライン（用水管）を埋設する工事である。この計画に伴う事前の試掘調査が1992年に、大阪府教育委員会文化財保護課および泉佐野市教育委員会によって、農道内の数カ所に対して実施された。その結果、本遺跡内のいずれの試掘調査区でも遺跡の遺存が再確認され、幅狭いパイプライン工事ではあっても遺跡の破壊は確実視された。そこで、大阪府泉州耕地事務所と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議がなされ、同保護課の指導により、本協会が本遺跡内北西部の埋管予定地を対象とした発掘調査を実施することになった。1993年11月1日に、本協会と泉州耕地事務所調査委託契約を結び、1994年2月1日から現地調査に着手した。

第II章 地理的・歴史的環境（第1・2図、図版1）

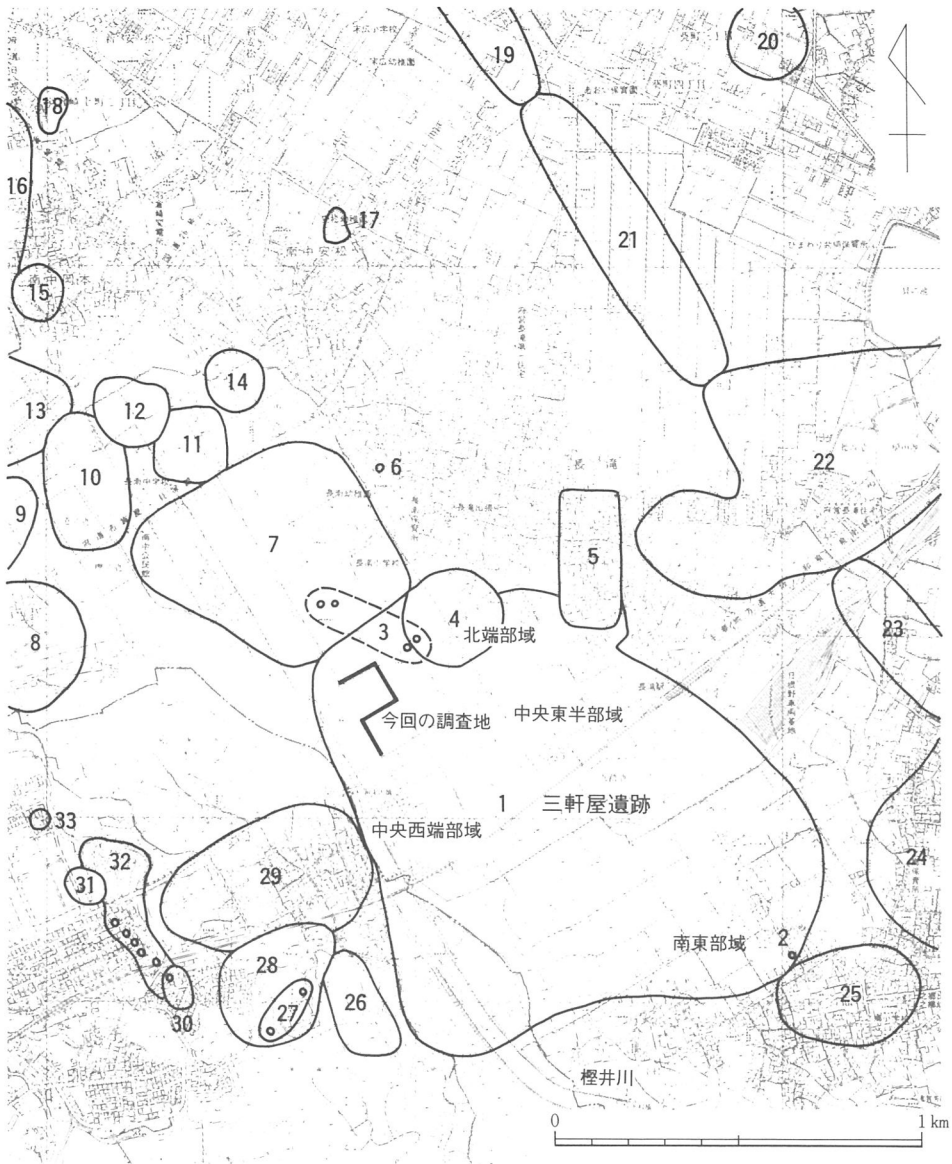
和泉地域の主要河川である樫井川は、和泉山脈からのびる山地・丘陵の縁辺に広がる段丘上を北西方向に流れる。三軒屋遺跡は、その右岸に広がる下位段丘上に立地する。現大阪湾海岸線との最短の直線距離は、北西方向に約2.5kmを測る。遺跡としてとらえられている範囲の現標高は約30～17mである。面積が広いので遺跡全体としては比高差を比較的もつが、遺跡の南部以外は北西に向かってゆるやかな下降傾斜面をなす。今回の調査対象地は、本遺跡内の最北西端部で、現標高約21.0～18.5mを測り、最も低所部にあたる。

三軒屋遺跡の周辺では、第1図に示したように、各期にわたる数多くの遺跡の分布が知られる^(註2)。このなかでは、本遺跡は範囲が広大で、和泉南部地域を代表する中心的存在になっている。

本遺跡内でのこれまでの数次におよぶ発掘・立会調査地点は、遺跡内で均質に分布するのではなく、主要地方道大阪・和泉・泉南線沿い付近からJR阪和線の間の一帯、つまり、遺跡域のほぼ中央において東西の帯状に集中している。しかもそのなかでも、樫井川のすぐ右岸域にあたる遺跡の「中央西端部域」と、JR長滝駅のすぐ西側の「中央東半部域」に密集している傾向が強い。従って、この地域の遺跡内容が最も判明しつつあるといえる。他では、長南小学校南東部にあたる遺跡の「北端部域」や、JR日根野車両基地の南方にあたる「南東部域」でいくつかの調査が実施されている。これらの調査地点の現地表面の標高を大局的にみると、南東部域（約30～21m）、中央東半部域（約27～24m）、中央西端部域（約23～21m）、北端部域（21～20m）の順で低くなる。この仮区分では、今回の調査対象地は、中央西端部域の北方で、北端部域の南西隣接部にあたる。

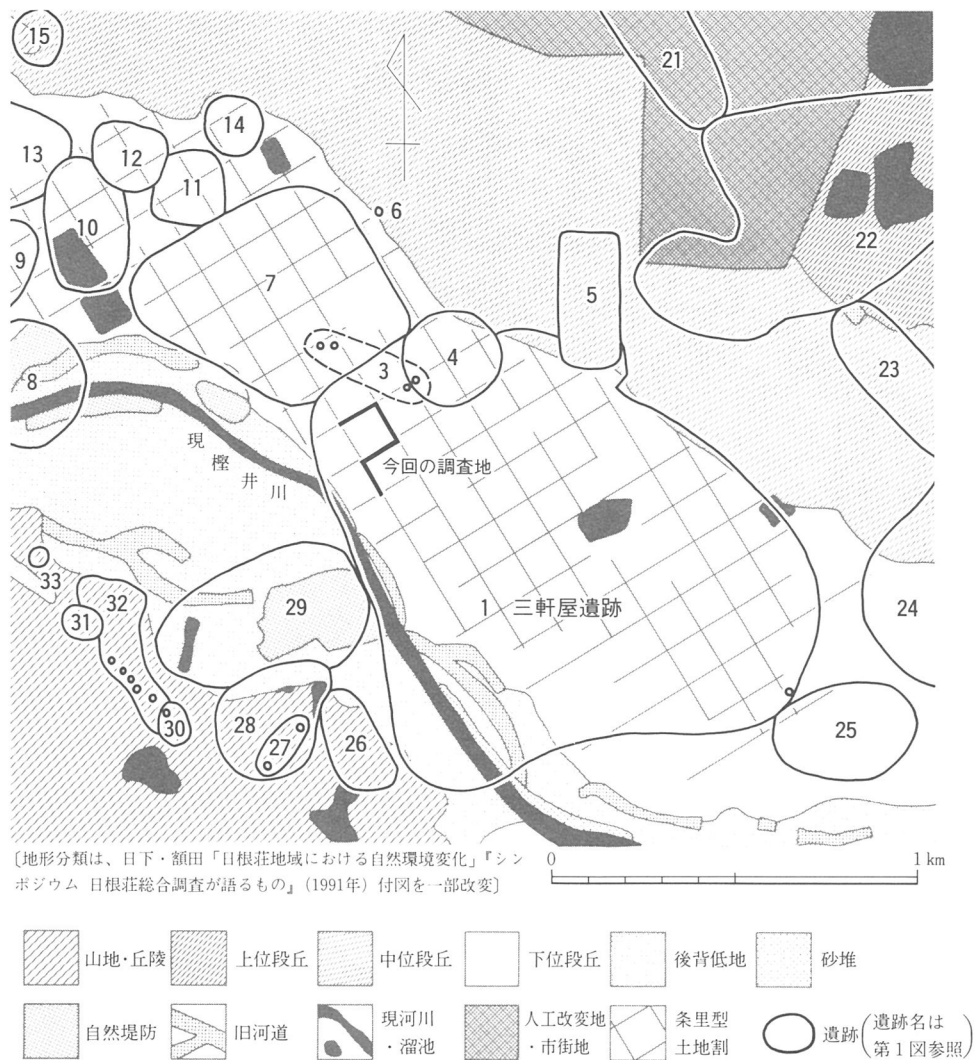
このように遺跡内の調査地点に偏在性はあるが、遺跡の全体像は徐々に解明されつつある。ただし、本遺跡では通時的にみた場合は分布の面的な連続性はもつものの、一時期における集団の占有範囲は必ずしも広いものではない。また、地点を異にした複数集団の占有を暗示する遺構・遺物のあり方をも示す。そこでここでは、時期ごとの諸痕跡の偏在性に留意しながら、これまで報告をみた情報をもとに考古学的成果を中心に紹介し、あわせて近接地の遺跡の状況にふれてみたい。

旧石器時代では、遺跡の中央東半部域でナイフ形石器の出土をみる。同時期の資料は、北方約1kmの長滝遺跡で多数確認されているのに加えて、東北東約800mの郷之芝遺跡で



- | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|
| 1 三軒屋遺跡 | 10 道ノ池遺跡 | 19 安松遺跡 | 28 フキアゲ山東遺跡 |
| 2 三軒屋遺跡内古墳 | 11 中菖蒲遺跡 | 20 俵屋遺跡 | 29 兎田遺跡 |
| 3 長滝古墳群(仮称) | 12 岡ノ崎遺跡 | 21 長滝遺跡 | 30 フキアゲ山西遺跡 |
| 4 ダイジョウ寺跡 | 13 船岡山南遺跡 | 22 植田池遺跡 | 31 新家オドリ山南遺跡 |
| 5 禅興寺跡 | 14 岸ノ下遺跡 | 23 郷之芝遺跡 | 32 新家古墳群 |
| 6 城ノ塚古墳 | 15 岡本庵寺遺跡 | 24 日根野遺跡 | 33 新家オドリ山東遺跡 |
| 7 諸目遺跡 | 16 船岡山遺跡 | 25 上之郷遺跡 | |
| 8 榎井城跡 | 17 南中安松遺跡 | 26 兎田古墳群 | |
| 9 藤波遺跡 | 18 羽倉崎上町遺跡 | 27 フキアゲ山古墳群 | |

第1図 調査地と周辺遺跡分布図



第2図 周辺地形分類図

も検出されている。この付近の中位～下位段丘面に、集団の占有領域が存在したと想定できる。

縄文時代では、中期以前の遺跡は周辺地域を含めて未確認である。後期にいたると、明確な遺構は未検出であるものの、本遺跡内の中央西端部域および南東部域で土器（中津式、北白川上層式、宮滝式ほか）が出土している。とりわけ、櫻井川右岸の自然堤防上にあたる前者域での出土量はやや多い。この現象は、汎西日本的にみられる、後期における遺跡立地の低地部への進出と符合し注目できる。

縄文晩期では、前半段階の突帯文前の土器（滋賀里Ⅲ式前後）が南東部域で見られるが、近接部の状況は未解明である。後半段階の突帯文期～弥生前期にかけては、中央西端部域で、終末の突帯文土器（長原式）と弥生前期の第Ⅰ様式（新段階）土器が共伴する竪穴式住居が確認されているほか、集落の一角が明らかにされつつある。とともに、この付近では南北約300m、東西約150mの範囲で、この時期の土器が共伴あるいは混在した状態で面的に分布しており、縄文後期以降の拠点的な集落のあり方を示す。突帯文と遠賀川式土器の共伴関係を示唆する同様な出土状況を確認できる遺跡に、北北西約2 kmの船岡山遺跡B地点がある。このように、本遺跡を含めた周辺部の様相は、和泉地域への農耕文化伝来の具体的様相を解明しうる可能性を秘めており、重要な位置を占める。

弥生中期では、中央西端部域において、中期初頭（第Ⅱ様式）にも遺跡の継続性が確認できる。また、詳細な時期は不明ながら、中期の甕棺も検出されている。一方、中央東半部域では、中期中・後葉（第Ⅲ・Ⅳ様式）の方形周溝墓や土器棺墓等が集中して確認され、墓域の様相が判明している。しかし、その直接的な母体となる集落本体部は未解明の状態である。同様の方形周溝墓は、本遺跡に北接する諸目遺跡でも確認されており、周辺での複数集団の存在を示す。

弥生後期～古墳前期では、本遺跡内の中央西端部域で断片的な土器資料はみられるが、周辺部地域を含めても、今までのところ顕著な痕跡は確認できていない。

古墳中期～後期に関しては、近年本遺跡内で、削平されていた古墳の検出が相次いでなされた。現在までに計5基の小形古墳が発見されており、調査の進展によって今後さらに古墳群の実態が解明されるであろう。現状では、北端部域で埴輪の樹立を伴う小形方墳を含む計4基が確認され、長滝古墳群と仮称されている。この付近から北接する諸目遺跡の南端にかけて、これまでの発掘調査によっても埴輪片がしばしば検出されており、比較的広い範囲に古墳群が形成されていた蓋然性が高い。他に、南東部域で、削平を受けた7世紀の横穴式石室の基底部分が偶然検出され、別の一群が存在しているようである。さらに、本遺跡の北方一帯に、現存しないが横穴式石室墳の古墳群がかつて存在していたようであり、大形石室の伝承をもつ城ノ塚古墳もそのひとつである。なお、これまで本遺跡の周辺では、樫井川左岸の丘陵上に、新家古墳群、兎田古墳群、フキアゲ山古墳群等の分布が知られていた。上述のように近年の調査成果によってそれらに対峙する右岸域にも古墳群が存在した点を明らかにされたことは大きな成果で、この地域のこれまでの歴史叙述に変更を迫っている。

一方、当該期の集落の内容はあまりよくわかっていない。が、本遺跡の中央西端部域のいくつかの地点で、竪穴式住居や掘立柱建物をはじめとする遺構が検出されており、近年検出されつつある古墳群の直接的な造営集団になる可能性が強い。また特筆できる点として、これまでこの一帯では各所で、陶質土器や初期須恵器が比較的多く出土しており、渡来系集団の居住していた可能性も指摘される。

飛鳥時代では、北端部域で、掘立柱建物群から構成される7世紀前半の集落が確認されており、集落の存在が予想できる。7世紀末には、本遺跡の北東に接する地に「禅興寺」が建立される。本寺院は、『日根野村荘園絵図』『行基年譜』や遺存字名によって存在が知られるが、これまで遺構の確認は全くなされていない。しかし、本遺跡の中央東半部域では川原式軒瓦等が出土しており、関連が注意される。

奈良・平安時代では遺構の検出は顕著ではないが、各種土器類や瓦等が出土している。土器類は量を問わなければ遺跡のほぼ全域で出土するようであり、瓦類は中央東半部域で目立つ。また北端部域の東部で円面硯や銚具（石製巡方）が出土していて、上述の禅興寺跡、あるいはそれにかかわる施設や集落等との関連性、さらには在郷官人層の存在が想定される。なお、付近の古代集落の顕著な例として、本遺跡の南東に接する上之郷遺跡で、平安前期の堀で画された屋敷跡が検出されている。

中・近世では、この時期の土器類を含む包含層が遺跡一帯に分布しているが、明確な建物等の検出はなく、遺跡内の多くは耕地に利用されていたようである。少なくとも、集落部分はまだ明確にはされてはいない。本遺跡のすぐ東側にある日根野遺跡は、絵図の遺存で著名な京都九条家「日根荘」にあたるが、発掘調査によって有力名主層の屋敷地と考えられる、溝で囲まれた屋敷地が5ヶ所確認された。また、北東約1kmの植田池遺跡内の発掘で調査された旧長滝墓地は、1944年の陸軍明野飛行学校佐野飛行場の建設で地上から消滅した近世の大墓地であった。この墓地は、当時移転されて今回の発掘調査地の隣接地に現存するが、調査では移転されずに残っていた墓地の内容をわれわれの目の当たりにした。

なお、本遺跡周辺には、現水田に条里制地割りが整然と遺っているが、その起源を追究できる明確な考古学的資料はまだ得られていない。

このようにみえてくると、今回の調査対象地は、縄文後期～弥生前期および古墳中・後期の居住域（遺跡の中央西端部域）の北側、さらには、長滝古墳群や飛鳥時代集落（遺跡の北端部域）の南西隣接地にあたる。よって、今回の調査ではそれらとの関連性をもつ考古学的な痕跡が検出できる可能性があった。それらの点に留意して現地調査にはいった。

第Ⅲ章 調査の成果(第3～18図、第1・2表、図版1～14)

第1節 調査の方法と経過(第3・4図、第1表、図版1～11)

はじめに、本協会 で用いている調査地区割りその他の記号に関して説明しておく。

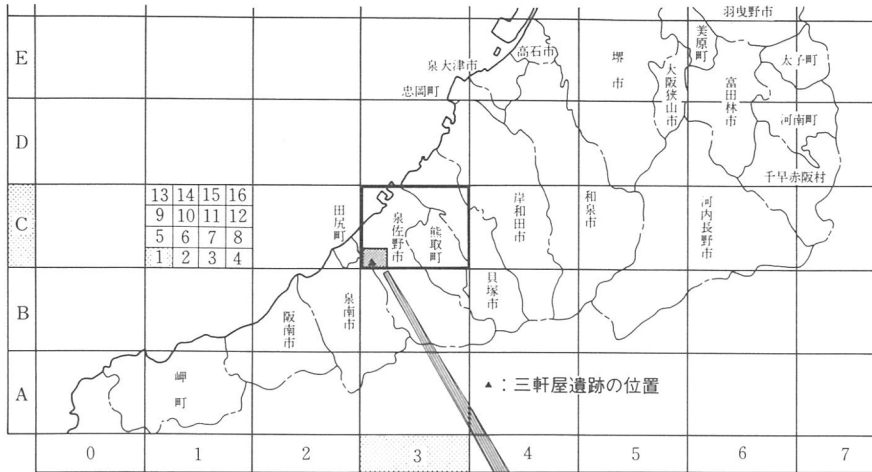
発掘調査では、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとに、4×4mの最小区画を設定している。大阪府発行新版(1984年建設省国土地理院承認)の1/2500地形図に示された500m区画とその呼称を踏襲し、これを100m区画に割って、北西隅から東へ01～25の番号を与える。さらにこれを縦横それぞれ25等分(4m)に区切ってA～Yの記号をふり、これによってできた4m四方の区画に対して、AA、ABというように表現する(第3図参照)。三軒屋遺跡の今回の調査範囲は第4図に示したように、大C-3-1-J(C31-J)中の04・05・09・10・14・15・19・20の100m区画内に位置する。

また、遺構の項で用いた、115-OR等の表記は、遺構名：番号(アラビア数字)と遺構種類(アルファベット)を示している。遺構の種類は本協会 で独自で定めた略号を用いており、本書に関する略号の意味は、OR：(自然)流路、OS：溝、OO：土壌、OP：ピット、OX：その他および不明遺構ほかとなる。なお、本書では、遺構番号の前に遺構種の一般的表現を併記した。

さて、今回の調査は、現農道内を上幅約1.8mで総長約400mにおよぶ範囲を対象としておこなった。総長のうち約100mごとに農道交差点にあたり方向を直角に変えるので、南から順に第1～第4区として区分し、第1区から順に調査を実施した。調査地の周辺のはほとんどは現在は農地にあたるが、西方約100～200mに現在の榎井川が北西に流行をもつ。また、調査区と榎井川の間には、旧長滝墓地から1944年に移転してきた墓地が存在する。調査地の東側には農業用幹水路が基本的に北西方向に流れ、第3区では調査区に東接し、第4区では北接して流れる。この幹水路部分は、現在も局所的な谷状地形を示し、地表面下にも埋積谷が予想される。

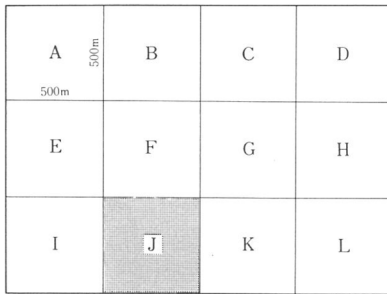
調査対象地の農道は、第1・第2区部では未舗装であるが、第3・第4区部ではアスファルト舗装がなされている。また農道は、農作業や通学路に常時利用されているので、順次通行止めをおこなって調査にあたらざるを得なかった。さらに、農道内には電柱や横断する埋設水路が随所に存在したので、各区ともに平面的に連続した調査区を設定するのは不可能であり、各所に未掘削部を残さざるを得なかった。従って、第1区ではa～k区、第

大阪府の1/2500地形図(都市計画図)の割付け方法



1/2500地形図「大C-3-1」=「C31」の図幅

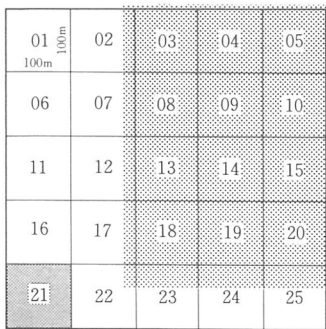
1/2500地形図内の500m 方形区画の割付け方法



「大C-3-1-J」=「C31-J」の図幅

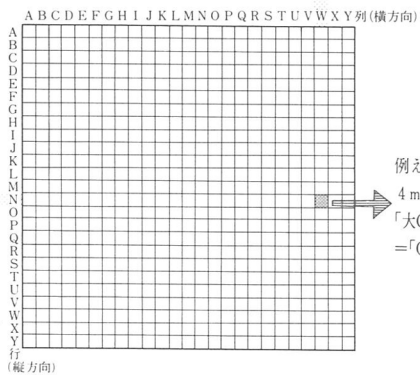
第4図(右頁)の図示範囲

500m 方形区画内の100m 方形区画の割付け方法



「大C-3-1-J-21」=「C31-J21」の図幅

100m 方形区画内の4m 方形区画の割付け方法

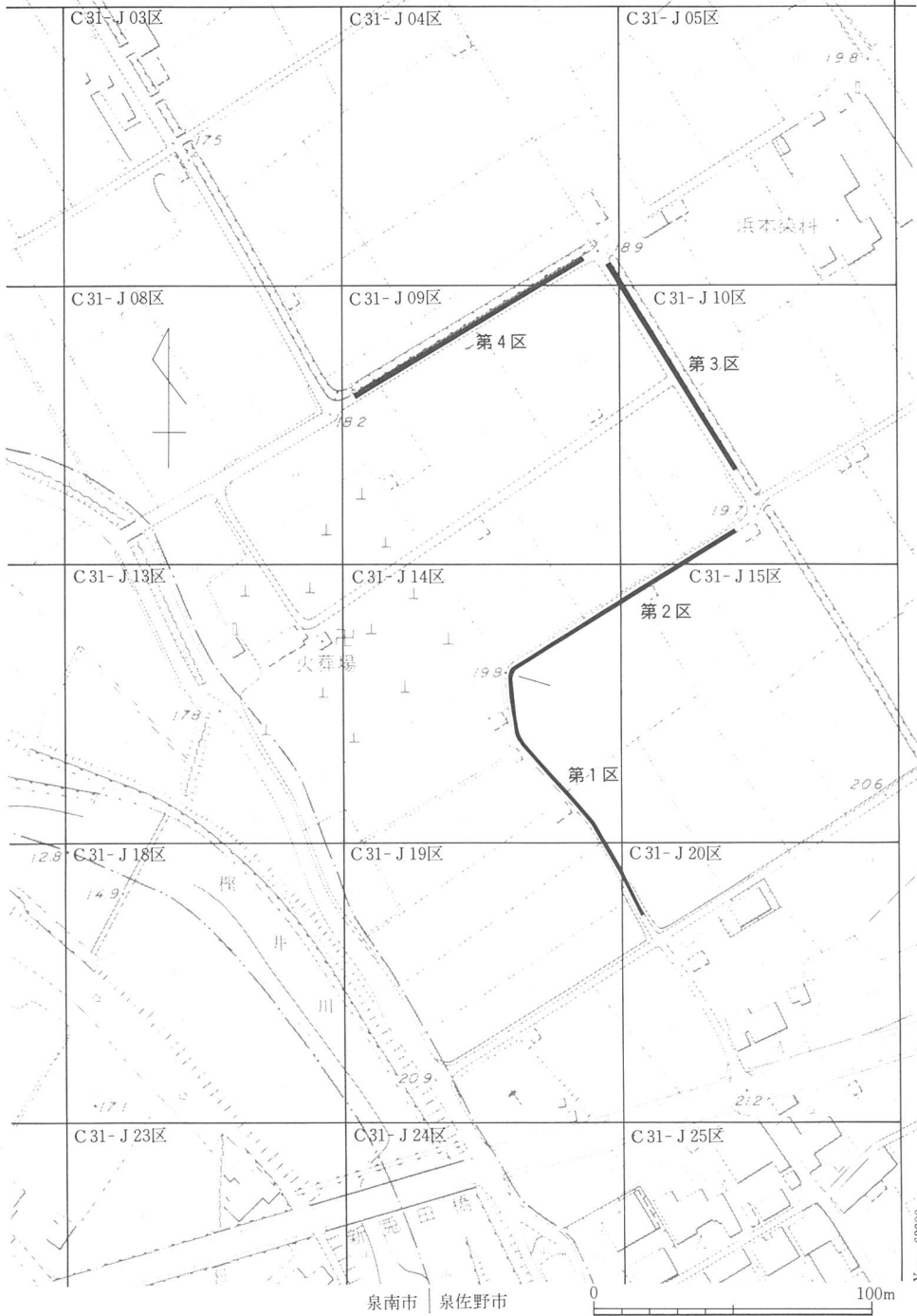


例えばこの
4m 方形区画は、
「大C-3-1-J-21-NW」
=「C31-J21NW」地区

第3図 地区割り方法図

X=-179500

C31-J区の北東部域



第4図 調査区配置図

2区ではa～i区、第3区ではa～e区、第4区ではa～i区という、小調査区を設けて実施した。調査総面積は約416m²になる。加えて、農道の両側には近年の擁壁や水路護岸施設が設けられていて、その際の工事による攪乱部も多く存在した。このように、調査は必ずしも順調に進行できたとはいえない。

調査では、先に示した本協会による地区割り方法を基本的には踏襲しながらも、本調査が幅狭の小調査区が34区もあるという実状を重視して、遺物の取り上げ、遺構や壁面の実測等はこの小調査区による地区割りを優先させておこなった。また、検出した遺構は、第1区では101～、第2区では201～、第3区では301～、第4区では401～という番号を付した。なお、調査地の条里地割りとどめる現農道は、真北に対して約30度西に振れる。よって、当然、第1～第4区の調査地の主軸もそれに沿った方位をとるが、現地調査においては、座標方位に近い方位をとって東西南北（例えば、第1区の主軸は北－南）を示し、本報告の記載や図版説明においても、大略的な方位を示す場合はこの表現を用いた。

調査における掘削は、現農道面下の盛土・攪乱層およびその直下の層までを重機を用いて除去し、以降は人力による掘り下げ調査を実施した。遺構実測には、航空測量はおこなわず、測量業者によって国土座標の得られた基準点に基づいて平板測量および遣り方測量を実施した。ただし、測量業者に委託して、周辺地形の航空写真撮影をおこなった。また、土層中花粉の委託分析をした。

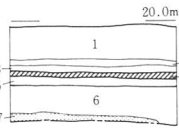
なお、調査にあたっては、調査区の農道に既存する擁壁や護岸施設の造作に伴う調査を含めて、泉佐野市教育委員会によって周辺部の発掘・立会調査が実施されているので、その具体的成果に関しては同教育委員会鈴木陽一氏からご教示いただいた。

第2節 基本層序（第5図、第1表）

今回の調査地の層序は、一部の箇所をのぞき基本的に共通したものである。

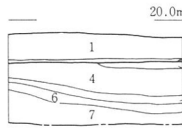
現農道面下には、厚さ約0.5～0.7mの近時の盛土・攪乱層が存在する。その下は暗灰黄～暗褐～灰黄色系砂質土からなる層厚約0.3～0.5mの、近世遺物をごく一部に包含する諸層が堆積している。それらは主として近世以降の耕作土（畑か）と推定される。その下面ではほぼ全域に、暗灰黄～灰黄～黄灰色系の砂質土ほかからなる層厚約0.1～0.3mの、中世包含層が存在する。ただし、後述する地山層のレベルが高い第1区中央部（第1-f区付近：第5図-（2））や反対に地山層の低い第4区西半部（第5図-（9））では、明確な中世包含層が形成されていない箇所もみられる。

(1) 第1-f区北半(西壁)



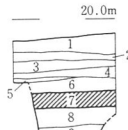
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR5/6黄褐色砂質土混じり
7.5Y5/1灰色砂質土
- 3: 2.5Y5/6黄褐色砂質土混じり
7.5Y5/1灰色砂質土(マンガン斑多含)
- 4: 10YR4/6褐色砂質土少量混じり
2.5Y5/2暗灰色砂質土
- 5: 10YR4/6褐色砂質土少量混じり
10YR4/2灰黄色砂質土(11I-OX)
- 6: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
5Y6/1灰色粘質土
- 7: 2.5Y5/6黄褐色砂礫

(2) 第1-i区北半(西壁)



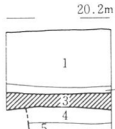
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR4/6褐色砂質土少量混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土
- 3: 10YR6/8明黄褐色粘質土
- 4: 10YR6/8明黄褐色粘質土
5Y7/3浅黄色粘質土との混合
- 5: 10YR6/8明黄褐色粘質土少量混じり
5Y7/2灰白色粘質土
- 6: 5Y6/1灰色粘質土
10YR7/8黄橙色粘質土との混合
- 7: 7.5Y7/2灰白色粘質土

(3) 第2-a区西端(北壁)



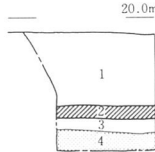
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR5/8黄褐色砂質土少量混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土
- 3: 10YR5/8黄褐色砂質土混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土(マンガン斑含)
- 4: 10YR5/8黄褐色砂質土混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土(マンガン斑多含)
- 5: 2.5Y4/6オリブ褐色砂質土混じり
5Y6/2灰オリブ色砂質土
- 6: 2.5Y4/4オリブ褐色砂質土少量混じり
2.5Y6/1黄灰色砂質土
- 7: 10YR5/8黄褐色砂質土少量混じり
10YR5/2灰黄色粘質土
- 8: 10YR6/8明黄褐色粘質土混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
- 9: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり
2.5Y6/4にぶい黄色粘質土
- 10: 10YR4/1褐色粘質土

(4) 第2-j区西端(北壁)



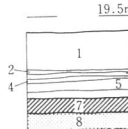
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR5/8黄褐色砂質土多く混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土(マンガン斑多含)
- 3: 10YR5/8黄褐色砂質土少量混じり
10YR5/2灰黄褐色砂質土
- 4: 10YR6/8明黄褐色粘質土混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
- 5: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり
2.5Y6/4にぶい黄色粘質土
- 6: 7.5YR5/8明褐色粘質土多量混じり
2.5Y6/4にぶい黄色粘質土(マンガン斑多含)
- 7: 5Y4/3暗オリブ色粘質土混じり
7.5Y5/1灰色粘質土
- 8: 7.5Y5/1灰色粘質土

(5) 第3-a区南端(西壁)



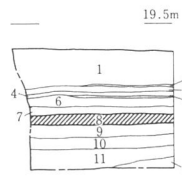
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR3/4暗褐色粘質土少量混じり
2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 3: 7.5YR6/8橙黄色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土
- 4: 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂礫

(6) 第3-e区北半(西壁)



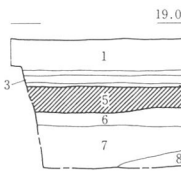
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 2.5Y5/6黄褐色砂質土混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土(マンガン斑多含)
- 3: 2.5Y5/6黄褐色砂質土少量混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土(マンガン斑多含)
- 4: 2.5Y5/6黄褐色粘質土混じり
2.5Y5/3黄褐色粘質土
- 5: 2.5Y5/6黄褐色砂質土
- 6: 10YR4/6褐色粘質土混じり
2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 7: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり
10YR5/2灰黄褐色粘質土(マンガン斑多含)
- 8: 2.5Y5/6黄褐色砂礫

(7) 第4-a区東端(南端)



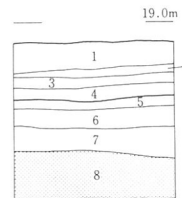
- 1: 攪乱・盛土
- 2: 5Y3/1オリブ褐色粘質土
- 3: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土
- 4: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土(マンガン斑含)
- 5: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土多量混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土(マンガン斑含)
- 6: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土少量混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土(マンガン斑含)
- 7: 2.5Y5/6黄褐色粘質土少量混じり
2.5Y5/1黄灰色粘質土(マンガン斑含)
- 8: 2.5Y5/6黄褐色粘質土混じり
2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 9: 2.5Y5/1黄灰色粘質土混じり
10YR5/6黄褐色粘質土
- 10: 2.5Y5/6黄褐色粘質土混じり
2.5Y6/1黄灰色粘質土
- 11: 10YR4/6褐色粘質土混じり
2.5Y5/6黄褐色粘質土
- 12: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり
2.5Y5/4黄褐色粘質土

(8) 第4-f区東端(南壁)



- 1: 攪乱・盛土
- 2: 10YR6/1褐色粘質土混じり
2.5Y5/6黄褐色粘質土
- 3: 2.5GY5/1オリブ灰色粘質土
- 4: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 5: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土(マンガン斑含)
- 6: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土
- 7: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり
5Y5/2灰オリブ色粘質土
- 8: 5GY5/1オリブ灰色粘質土

(9) 第4-h区西端(南壁)



- 1: 攪乱・盛土
- 2: 5Y3/1オリブ褐色粘質土
- 3: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
5Y5/2灰オリブ褐色粘質土
- 4: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土
- 5: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰色粘質土
- 6: 2.5Y6/2灰黄色粘質土
10YR5/8黄褐色粘質土との混合
- 7: 2.5Y6/2灰黄色砂質土
10YR5/8黄褐色砂質土との混合
- 8: 10YR3/4暗褐色砂礫



第5図 基本層序断面図

第1表 遺構面および砂礫層上面レベル一覧表

	上位遺構面	下位遺構面	砂礫層上面
第1区南端(第1-a区)	19.5 m	19.4 m	18.7 m
第1区南半(第1-d区)	19.25m	19.25m	19.25m
第1区中央(第1-g区)	19.25m	19.15m	(18.5 m)
第1区北半(第1-i区)	19.4 m	19.4 m	(18.55m)
第1区北端(第1-k区)	19.1 m	18.7 m	(18.25m)
第2区西端(第2-a区)	19.0 m	18.8 m	(18.1 m)
第2区中央(第2-d区)	19.2 m	19.0 m	(18.6 m)
第2区東端(第2-i区)	19.2 m	18.95m	17.7 m
第3区南端(第3-a区)	18.8 m	18.6 m	18.45m
第3区中央(第3-d区)	18.5 m	18.4 m	18.45m
第3区北端(第3-e区)	18.3 m	18.15m	18.15m
第4区東端(第4-a区)	18.25m	18.1 m	17.45m
第4区中央(第4-c区)	18.2 m	17.25m	17.4 m
第4区西端(第4-i区)	18.15m	17.95m	17.0 m

()は、礫層面が検出できなかった部分での調査最深部のレベル

この中世包含層の上面で中世後半期～近世の遺構、下面で同一面として縄文時代～中世前半期の遺構が検出できた。前者を「上位遺構面」、後者を「下位遺構面」と呼称する。

この2枚の遺構面は、今回の調査範囲のうちでも水平に拡がるのではない。第1表に示したように、傾向として第1・第2区では北方に向かうに従って下降し、現在も主要水路のみられる第3・第4区では、水路の流れに従って下降傾斜する。ただし、第1区の北半部にあたる第1-i区中央部付近が周辺に比べて高い傾向を示し、その北・南側が低くなる。後述するようにこの遺構面の低い部分に、主として下位遺構面で溝、流路、落ち込み状遺構等を検出した。なお、上位遺構面を確認できた範囲は極めて限られたものであり、今回の検出遺構の主要なものは下位遺構面に属する。

下位遺構面の下には、上位から原則として、黄色系粘質土、灰色系粘質土、褐色系砂礫と続く。最後者の砂礫層は、一定程度の締めりをもった堆積層であり、段丘礫層の可能性が強い。また、これら諸層の堆積状況は、必ずしも水平堆積を示すものではなく、砂礫層の上面のレベルは部分的に凹凸をもつ。砂礫層を確認できたかぎりの所見では、その上面の標高は、第1区南半部(第1-c～f区)が最も高く約18.5～19.3m、第3・第4区では、遺構面の検出傾向と同様に現水路の流れにそって下降し、第3区では約18.8～18.15m、第4区では約17.9～16.7mを測る(第1表)。

これら下位遺構面下の諸層に対しても人力による掘り下げを実施して遺構・遺物の確認に努めたが、人為的な痕跡は全く確認できなかった。従って、上述の下位遺構面の下の諸層は今回の調査における地山層と判断できる。

第3節 検出遺構と遺物出土状況（第6～14図、図版3～11）

（1）第1区（第6・7・11・12図）

A 概要

本区は今回の調査のなかで最も多くの遺構を検出した。

上位遺構面では第1-i区北端から第1-j区にかけて中世の小溝3条、落ち込み状遺構2基等が、下位遺構面ではほぼ全域にかけて、縄文晩期あるいは縄文時代と推定される溝や落ち込み状遺構等若干、縄文（晩期?）～古墳後期の自然流路2条、古墳中期の溝1条、古墳後期の溝1条、落ち込み状遺構2基等が検出できた。このように、下位遺構面では縄文～古墳時代にかけての、低湿地状を呈していたと推定される遺構や排水を目的とした遺構が目立つ。

本調査区の出土遺物量は、流路115-ORをのぞいて多くはなく、全体でコンテナ箱で3箱である。内容では、縄文土器（晩期突帯文）、弥生土器（前期、中期か）、古墳時代～中世の土器類のほか、石鏃（縄文晩期）、サヌカイト剥片（縄文～弥生時代）、土錘（中世か）、砥石（中世か）等がある。

B 上位遺構面

溝106-OS

第1-j区南端で検出した、幅約0.25m、深さ約0.1mを測る小溝である。やや蛇行するが、ほぼ東西に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土は浅黄色砂質土からなり、土師器片（中世）が若干出土した。遺物から中世の所産と推定できる。

溝105-OS

第1-j区南半から第1-i区北端で検出した、幅約0.3～0.5m、深さ約0.1mを測る小溝である。ほぼ北北西～南南東に主軸をおき、溝106-OSに切られる。横断面形はU字形状を呈し、埋土は浅黄色砂質土からなり、土師器片（中世）が若干出土した。遺物から中世の所産と推定できる。

溝107-OS

第1-j区南半で検出した、幅約0.5m以上、深さ約0.15mを測る小溝である。西肩部だ

けを検出したが、溝105-OSに平行する。横断面形はU字形状を呈し、埋土は浅黄色砂質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

落ち込み状遺構108-OX

第1-j区北半で検出した、南北約5.0m、東西約0.8m以上、深さ約0.2mを測る、西方への落ち込み状遺構である。東肩部のみを検出したが、平面形はほぼ北北西-南南東に主軸をおく不整形を呈する。横断面形は幅広の逆台形を呈し、埋土はにぶい黄色砂質土からなり、上位には15~20cm大の自然礫の集積が部分的にみられた。須恵器片（古墳後期）、瓦器片（中世）が若干出土した。遺物から中世の所産と推定できる。

土壇104-OO

第1-i区北端で検出した、径約0.4m、深さ約0.1mを測る、平面不整円形の小土壇である。横断面形はU字形を呈し、埋土は浅黄色砂質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

C 下位遺構面

落ち込み状遺構110-OX

第1-a区~第1-c区南端で検出した、南北約10.0m以上、東西約0.5m以上、深さ約0.15mを測る、平面が不整形の東~南方向への落ち込み状遺構である。横断面形はU字形を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなり、須恵器小片（古墳後期）が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

落ち込み状遺構102-OX

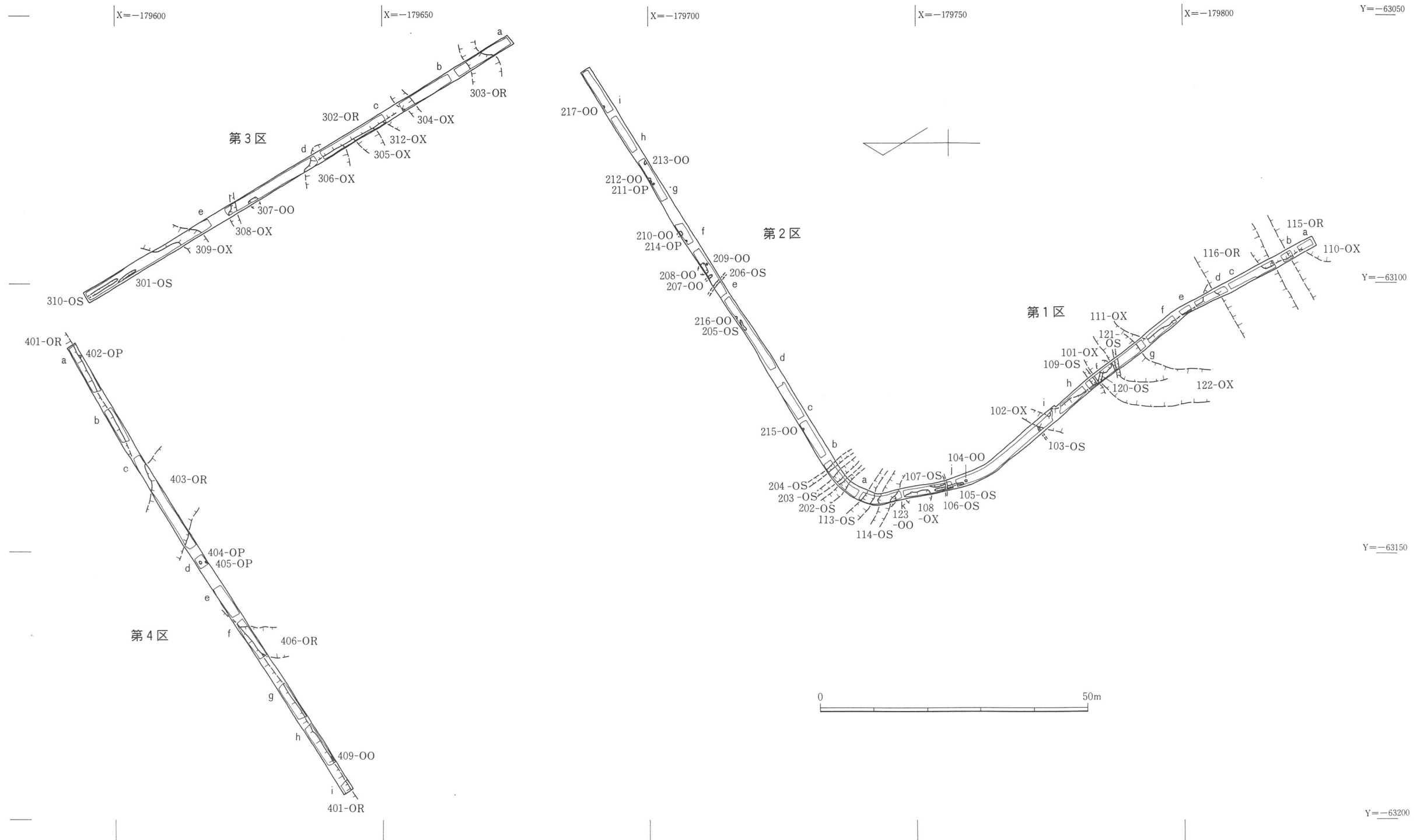
第1-g区北端から第1-i区南端で検出した、南北約13.5m以上、東西約1.4m以上、深さ約0.1mを測る、平面が溝状不整形の落ち込み状遺構である。横断面形はU字形を呈し、埋土は暗灰黄色粘質土からなり、須恵器小片（古墳後期）、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

土壇112-OO

第1-g区で検出した、南北約0.8m以上、東西約0.3m以上、深さ約0.15mを測る、平面が推定不整円形の土壇状遺構である。西端部の一部を検出したにすぎない。横断面形はU字形状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなり、須恵器小片（古墳後期）が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

溝113-OS

第1-k区北半で検出した、幅約1.5~1.8m、深さ約0.35mを測る溝である。ほぼ南東-



第6図 遺構配置図

北西に主軸をおく。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は黄灰色粘質土、灰オリーブ色細砂ほかからなり、土師器片（古墳後期）、須恵器片（同）、弥生土器片（前期）が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

溝114-OS

第1-k区南半で検出した、幅約2.0m、深さ約0.25mを測る小溝である。ほぼ南東-北西に主軸をおく。横断面形は幅広のU字形状を呈し、埋土は暗灰黄色粘質土ほかからなり、須恵器片（古墳中期）、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から古墳中期の所産と推定できる。

流路115-OR

第1-a区から第1-b区南端で検出した、幅約5.0m以上（泉佐野市教育委員会確認では約15m）、深さ約0.9m以上を測る自然流路である。ほぼ東から西に流れる。落ち込み状遺構110-OXに切られる。横断面形は幅広のU字形状を呈し、埋土は、上層が灰黄色粘質土、黄灰色砂質土ほか、下層が暗灰黄色粘質土、暗オリーブ灰色細砂～砂質土からなり、上層から土師器片（古墳後期）、須恵器片（同）、下層から弥生土器片（中期か）が出土した。後者の弥生土器は1、2点だけであるが、土師器、須恵器はコンテナ箱に約半分の量が出土し、今回の調査の遺構のなかで出土量が多い方である。層位ごとの遺物の出土状況から、弥生中期～古墳後期にかけての所産と推定できる。この遺構は、南方（遺跡の中央西端部域）に展開する当該期集落の北限を画する自然流路となる可能性がある。

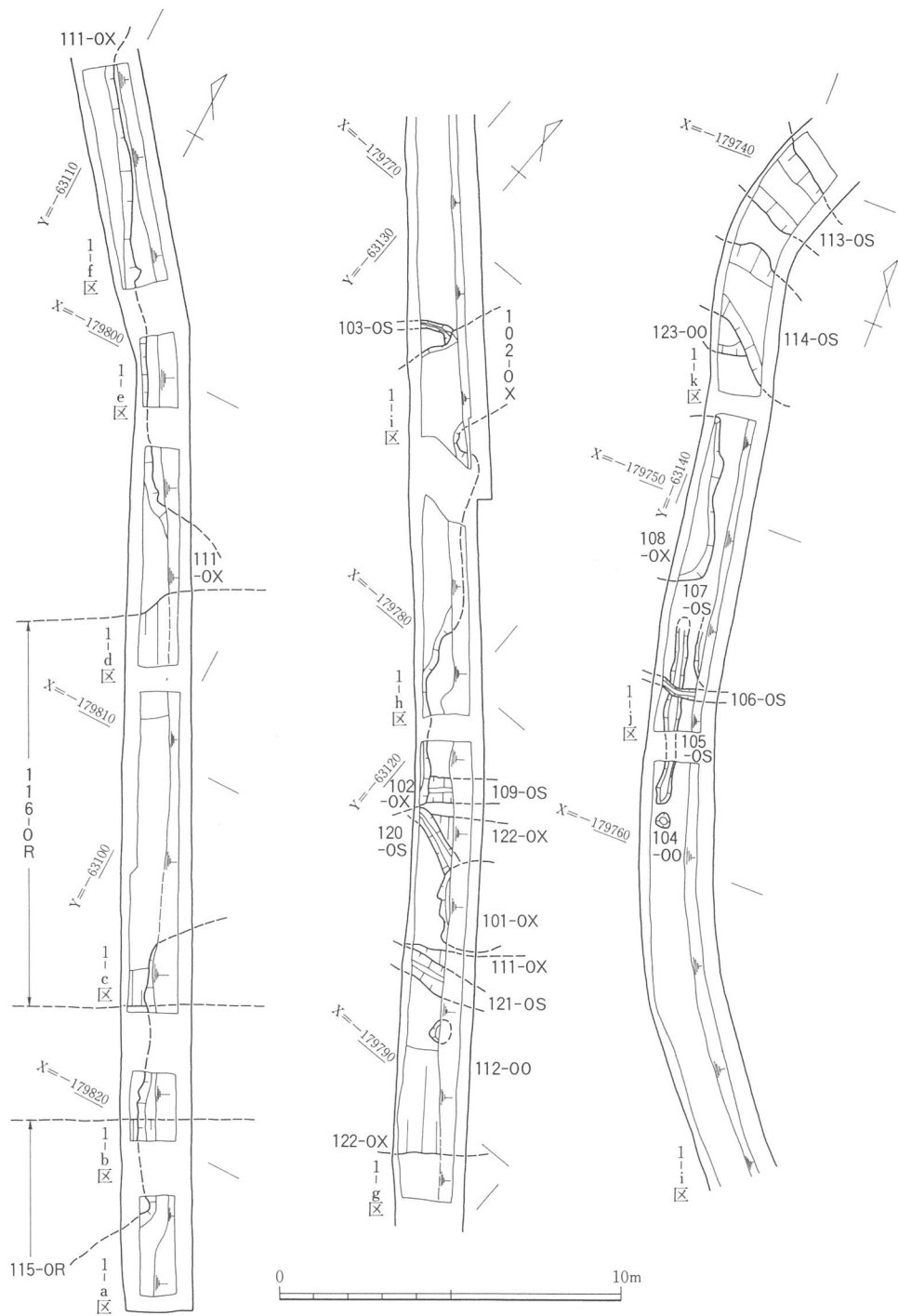
なお、後述した花粉分析の結果では、上・下層ともにイネ科花粉が高い出現率で検出されており、付近での稲作の可能性が指摘されている。

流路116-OR

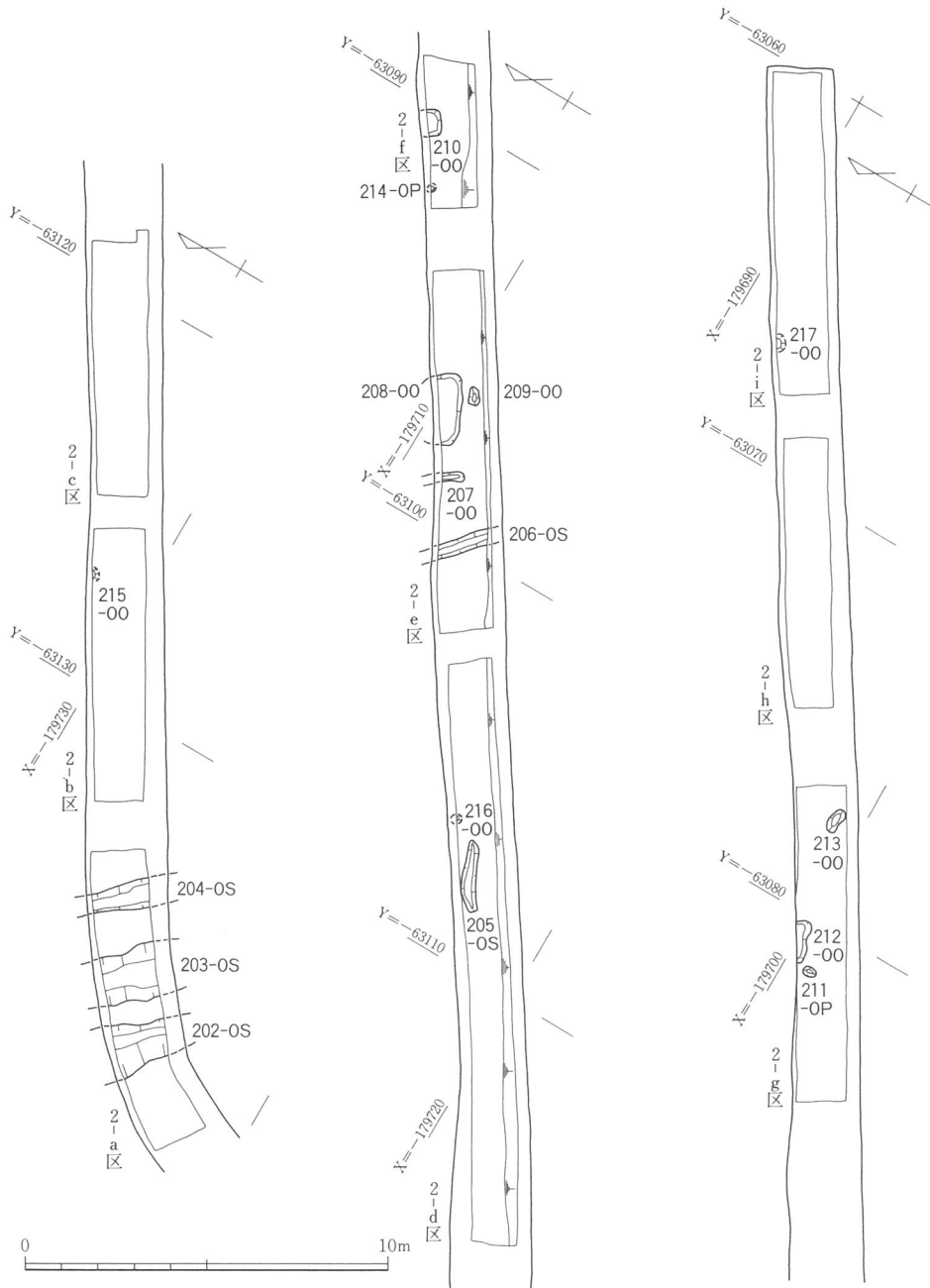
第1-c区～第1-d区南半で検出した、幅約11.5m、深さ約0.9m以上を測る自然流路である。ほぼ東から西に流れる。落ち込み状遺構111-OXに切られる。横断面形は幅広のU字形状を呈し、埋土は灰色粘質土、黄灰粘質土ほかからなり、最下部にオリーブ色砂が存在する。縄文土器片（晩期か）、弥生土器片（前期か）、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期か）～弥生時代（前期か）にかけての所産と推定できる。

落ち込み状遺構111-OX

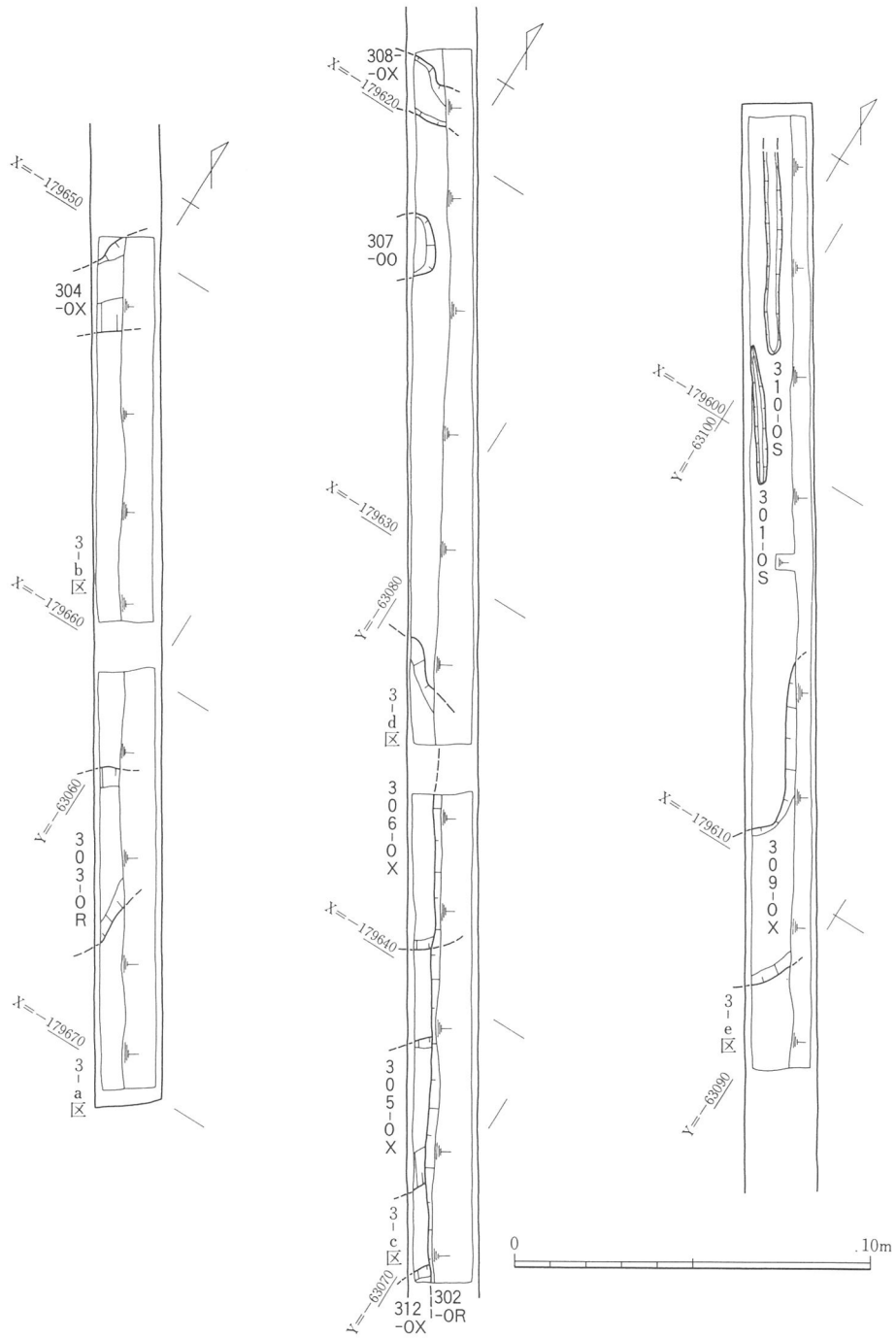
第1-d区から第1-g区南半で検出した、南北約24.0m以上、東西約6.0m以上、深さ約0.15mを測る、平面が不整形帯状に広がる可能性のある、南西方向への落ち込み状遺構である。横断面形はU字形を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなり、縄文土器片（晩期）、



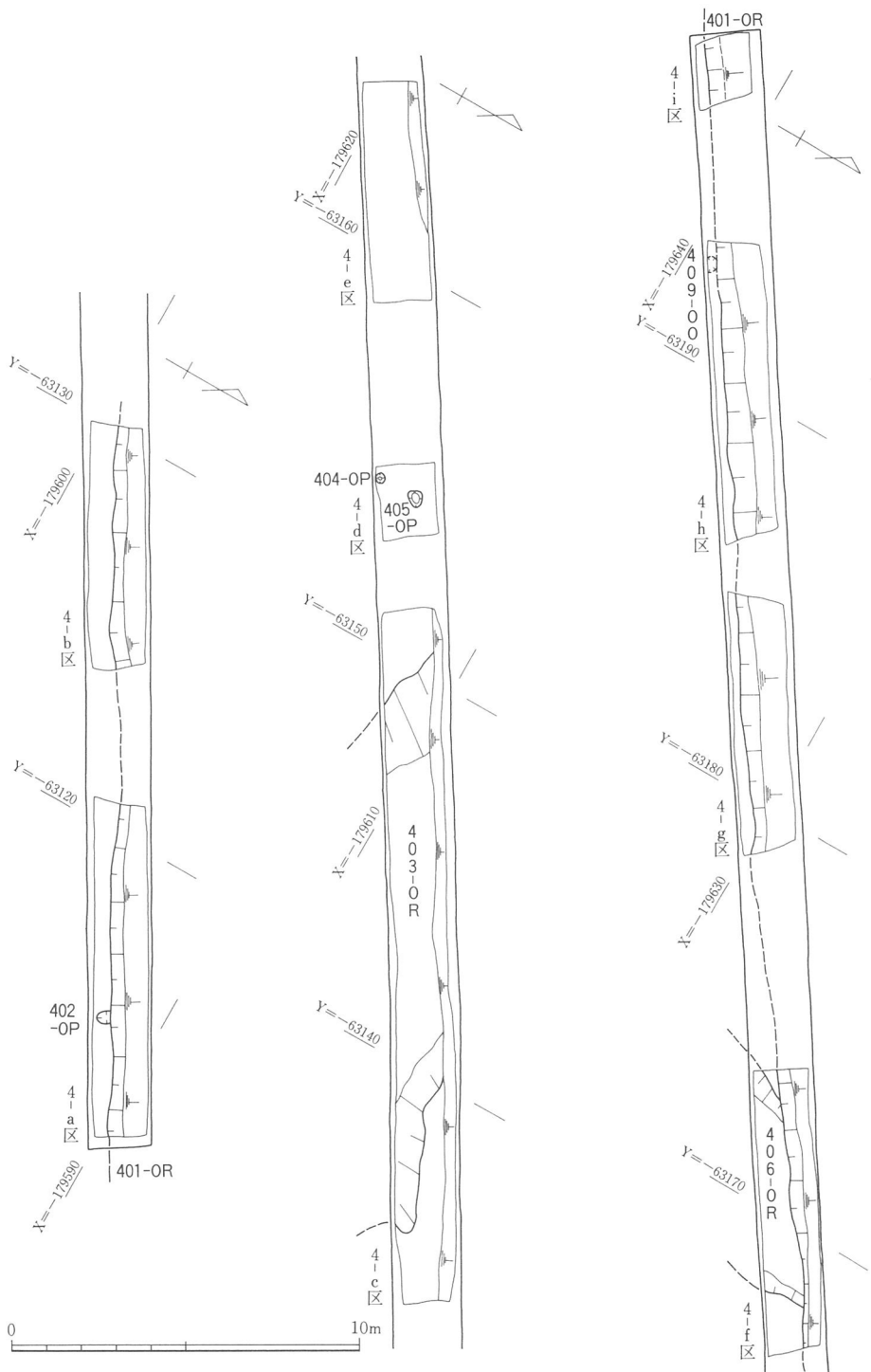
第7図 第1区遺構実測図



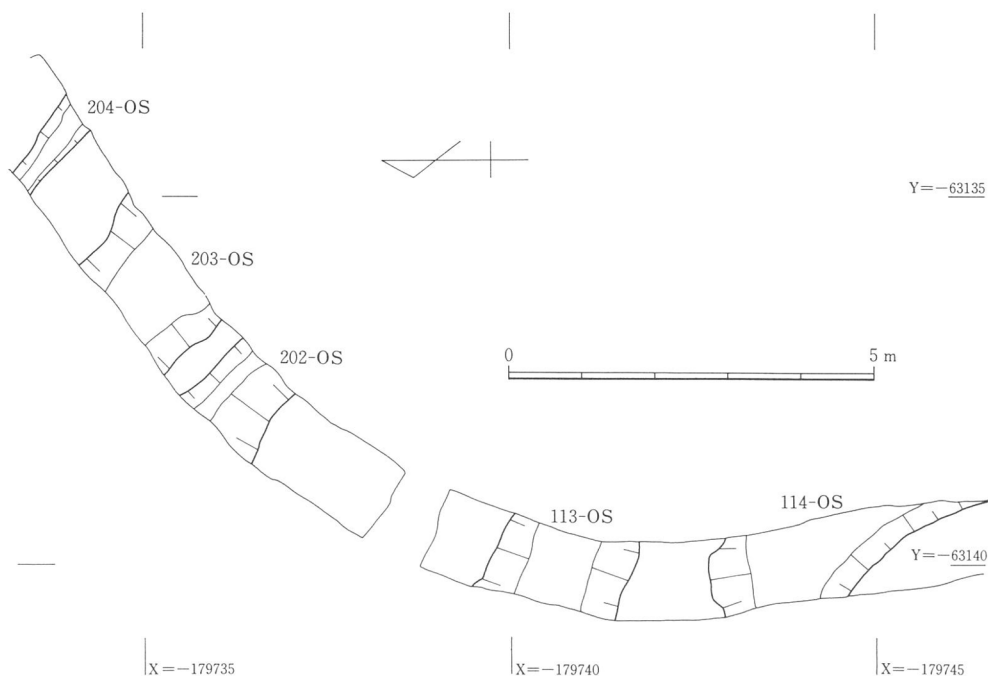
第8图 第2区遺構実測図



第9図 第3区遺構実測図



第10図 第4区遺構実測図



第11図 溝113・114・202～204-OS実測図

石鏃、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から縄文晩期の所産と推定できる。

落ち込み状遺構101-OX

第1-g区で検出した、南北約2.4m以上、東西約0.4m以上、深さ約0.1mを測る、平面が不整形の北東方向への落ち込み状遺構である。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土からなり、縄文土器片（晩期か）が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期か）の所産と推定できる。

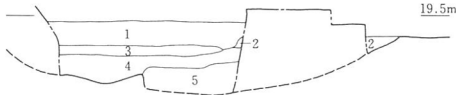
落ち込み状遺構122-OX

第1-g区で検出した、南北約9.8m、東西約7.0m以上、深さ約0.5mを測る、平面が溝状の落ち込み状遺構である。溝121・120-OS、落ち込み状遺構111-OXに切られる。横断面形は浅く幅広のU字形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土からなり、縄文土器片（晩期か）、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期か）の所産と推定できる。

溝121-OS

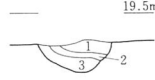
第1-g区で検出した、幅約0.7～0.9m、深さ約0.45mを測る溝である。ほぼ東西に主軸をおき、落ち込み状遺構111-OXに切られる。横断面形はU字形状を呈し、埋土は灰色

115-OR (第1-a・b区)



- 1: 10YR4/2灰黄褐色砂質土
- 2: 10YR5/6黄褐色粘土混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土(炭含)
- 3: 2.5Y4/1黄灰色粘質土と2.5Y4/1黄灰色細砂との混合
- 4: 7.5YR5/6明褐色粘質土混じり2.5Y5/2暗灰黄色粘質土
- 5: 5GY4/1暗オリーブ灰色細砂～砂質土

121-OS (第1-g区)



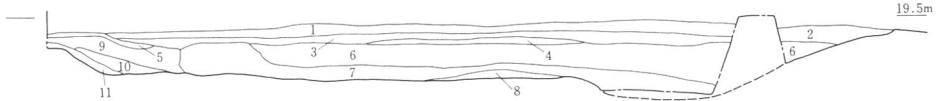
- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり
2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 2: 10YR5/8黄褐色粘質土多量混じり
2.5Y5/1黄灰色粘質土(炭含)
- 3: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
5Y5/1灰黄色粘質土(炭含)

120-OS (第1-g区)



- 1: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり
2.5Y4/2暗褐黄色粘質土(炭含)

116-OR (第1-c・d区)



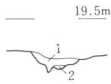
- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土少量混じり10YR4/2灰黄褐色砂質土
- 2: 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土少量混じり2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
- 3: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり10YR4/2灰黄褐色砂質土
- 4: 10YR5/8黄褐色砂質土少量混じり10YR5/2灰黄褐色砂質土
- 5: 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土と10YR5/8黄褐色砂質土との混合
- 6: 5Y4/1灰黄色粘質土(小礫少量含)
- 7: 2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 8: 5Y6/3オリーブ黄色砂
- 9: 2.5Y4/1灰黄色粘質土
- 10: 2.5Y4/1灰黄色粘質土(9よりやや砂質)
- 11: 2.5Y4/1灰黄色粘質土(細砂含)

122-OX (第1-g区)



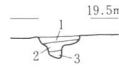
- 1: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 2: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土(炭含)

109-OS (第1-g区)



- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり
- 2: 2.5Y4/1黄灰色粘質土(炭含)
- 2: 7.5YR5/8明褐色砂質土混じり
- 10YR4/1褐灰色砂質土(細砂含)

103-OS (第1-i区)



- 1: 7.5YR6/8橙色粘質土混じり
- 7.5Y6/1灰黄色粘質土
- 2: 2.5Y6/2灰黄色粘質土
- 3: 10YR6/8明黄褐色粘質土少量混じり
- 5Y8/2灰白色粘質土

108-OX (第1-j区)



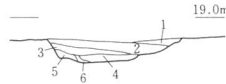
- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土混じり2.5Y6/3にぶい黄色砂質土(炭含)
- 2: 10YR4/6褐色砂質土少量混じり2.5Y5/1黄灰色砂質土
- 3: 2.5Y5/6黄褐色砂質土少量混じり2.5Y6/3にぶい黄色砂質土

123-OO (第1-k区)



- 1: 10YR5/2灰黄褐色粘質土と
10YR5/8黄褐色粘質土との混合

113-OS (第1-k区)



- 1: 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土
- 2: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
2.5Y4/1黄灰色粘質土(炭含)
- 3: 10YR5/8黄褐色砂質土混じり
2.5Y4/1黄灰色砂質土
- 4: 5Y5/3灰オリーブ色細砂
- 5: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
10YR4/2灰黄褐色粘質土
- 6: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
10YR5/2灰黄褐色粘質土

114-OS (第1-k区)



- 1: 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土と
2.5Y6/2灰黄色砂質土との混合
- 2: 2.5Y5/1黄灰色砂質土と
10YR5/8黄褐色砂質土との混合



第12図 第1区主要遺構断面図

粘質土ほかからなり、縄文土器片（晩期か）が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期か）の所産と推定できる。

溝109-OS

第1-g区北半で検出した、幅約0.8m、深さ約0.3mを測る溝である。ほぼ北東-南西に主軸をおき、落ち込み状遺構102-OXに切られる。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は黄灰色粘質土ほかからなり、縄文土器片（晩期か）、サヌカイト剥片が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期か）の所産と推定できる。

溝120-OS

第1-g区北半で検出した、幅約0.4~0.6m、深さ約0.3mを測る小溝である。ほぼ南北に主軸をおき、落ち込み状遺構101・102-OXに切られる。横断面形はU字形状を呈し、埋土は暗褐色粘質土からなり、縄文土器片（晩期か）、弥生土器片が若干出土した。遺物から縄文時代（晩期）～弥生時代の所産と推定できる。

土壌123-OO

第1-k区南端で一部を確認した、南北約1.2m以上、東西約0.9m以上、深さ約0.3mを測る、平面形不明の土壌状遺構である。溝114-OSに切られる。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土ほかからなる。遺物は出土しなかった。遺構の切り合い関係から、古墳中期以前の所産と推定できる。

溝103-OS

第1-i区南半で検出した、幅約0.2m、深さ約0.3mを測る小溝である。やや蛇行するが、ほぼ北東-南西に主軸をおき、落ち込み状遺構102-OXに切られる。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は灰黄色粘質土ほかからなる。遺物は出土しなかった。遺構の切り合い関係から古墳後期以前の所産と推定できる。

(2) 第2区（第6・8・11・13図）

A 概要

上位遺構面では精査したにもかかわらず遺構はまったく確認できなかったが、下位遺構面で溝、土壌等を検出した。本調査区の遺構のあり方は、西端の第2-a区と、中央から東部の第2-d区以東で様相を異にする。

前者では第1区の様相と近似し、平行した状態で縄文晩期～弥生時代、弥生前期、古墳後期の溝各1条がある。後者の範囲では、ごく一部をのぞいて出土遺物がなかったので確定要素にかけるが、埋土の様相から中世と推定できる小溝2条、土壌数基、ピット等があ

る。前者部の遺構から概要を述べる。

本調査区の出土遺物量は非常に少なく、コンテナ箱半分にも満たない。内容では、縄文土器（晩期突帯文）、弥生土器（前期）、古墳時代～中世の土器類等がある。

B 下位遺構面

溝204-OS

第2-a区東半で検出した、幅約0.5～0.8m、深さ約0.2mを測る溝である。ほぼ南東―北西に主軸をおく。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は灰黄色砂質土ほかからなり、土師器片（古墳後期）、須恵器片（同）、弥生土器片が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

溝202-OS

第2-a区西半で検出した、幅約1.0～1.5m、深さ約0.3mを測る溝である。ほぼ南東―北西に主軸をおく。横断面形は二段掘り状を呈し、埋土は褐灰砂粘質土ほかからなり、弥生土器片（前期）が若干出土した。遺物から弥生前期の所産と推定できる。

溝203-OS

第2-a区中央で検出した、幅約1.3～1.6m、深さ約0.35mを測る溝である。ほぼ南東―北西に主軸をおく。横断面形は幅広の逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土ほかからなり、縄文土器片（晩期）、弥生土器片（前期か）が若干出土した。遺物から縄文晩期～弥生時代（前期か）の所産と推定できる。

なお付言しておく、後掲した花粉分析の結果では、ソバ属の花粉が検出されており、付近でのソバ栽培の可能性が指摘されている。

溝205-OS

第2-d区東半で検出した、幅約0.3～0.45m、深さ約0.2mを測る小溝である。ほぼ東―北東―西南西に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土はにぶい黄色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

溝206-OS

第2-e区西半で検出した、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る小溝である。ほぼ南東―北西に主軸をおく。横断面形は逆台形状を呈し、埋土はにぶい黄色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

土壌208-OO

第2-e区東半で南半部だけを検出した、南北約0.8m以上、東西約2.0m、深さ約0.1m

を測る、平面が不整形の土壌状遺構である。横断面形は幅広の逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色砂質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

その他の遺構

このほかに第2-b区以東で、数基の土壌状遺構やピットを検出した。第2-b区の土壌215-00、第2-d区の土壌216-00、第2-e区の土壌207・209-00、第2-f区の土壌210-00、ピット214-OP、第2-g区の土壌212・213-00、ピット211-OP、第2-i区の土壌217-00がそれである。長軸長約0.8m以下、深さ約0.4m以下の、平面が不整形あるいは溝状をなす。埋土は灰黄～灰黄褐色系の砂～粘質土からなる。遺物は、ピット214-OPから土師器片（中世か）1点が出土したにすぎない。これらの遺構は、埋土の状況から中世の所産と推定できる。

(3) 第3区（第6・9・13区）

A 概要

上位遺構面で中世の小溝1条、中世あるいは近世と推定できる自然流路1条、下位遺構面で古墳後期の自然流路1条、時期不明の落ち込み状遺構や土壌状遺構数基等を検出した。

本調査区の出土遺物量も非常に少なく、コンテナ箱半分にも満たない。内容では、古墳時代～中世の土器類のほか、土錘（中世以降か）等がある。

B 上位遺構面

流路302-OR

第3-c区で検出した、幅約1.4m以上、深さ約0.6m以上を測る自然流路である。ほぼ南南東から北北西に流れる。西岸部分だけの検出であるが、横断面形は幅広のU字形状を呈する。肩から底面にいたる側斜面には護岸施設として、小人頭大の石を用いた貼り石状石組みが部分的に遺存していた。埋土は灰オリーブ粘質土ほかからなり、平瓦片1点が出土したにすぎない。本遺構は、中世後期あるいは近世の所産と推定できるが、詳細な時期は特定できない。ただし、現在も調査区に東接して流れる水路の前身遺構と考えてよいであろう。

溝301-OS

第3-e区北半で検出した、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る小溝である。ほぼ南南東～北北西に主軸をおく。横断面形はU字形状を呈し、埋土は淡灰黄褐色粘質土からなり、須恵器片（古墳後期）、瓦器片（中世）が若干出土した。遺物から中世の所産と推定できる。

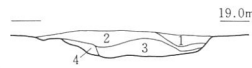
C 下位遺構面

202-OS (第2-a区)



- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり2.5YR5/1黄灰色粘質土
- 2: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり10YR4/1褐灰色粘質土
- 3: 10YR4/6褐色粘質土少量混じり10YR4/1褐灰色粘質土
(10YR6/8明黄褐色粘質土ブロック状にまじる)
- 4: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり10YR4/1褐灰色粘質土
(マンガン斑多含)
- 5: 10YR3/4暗褐色砂質土と
7.5YR5/8明褐色砂質土少量混じり10YR4/1褐灰色砂質土

203-OS (第2-a区)



- 1: 2.5Y6/2灰黄色砂質土
- 2: 10YR3/4暗褐色粘質土少量混じり
10YR4/1褐灰色粘質土
- 3: 10YR4/1褐灰色粘質土ブロック混じり
2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
- 4: 2.5Y7/1灰白色粘質土混じり
10YR5/1褐灰色粘質土

204-OS (第2-a区)



- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土混じり
2.5Y6/2灰黄色砂質土
- 2: 2.5Y5/3黄褐色砂質土と
7.5YR5/8明褐色砂質土との混合

215-OO (第2-b区)



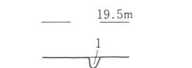
- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土多く混じる
10YR5/2灰黄褐色砂質土

216-OO (第2-e区)



- 1: 10YR6/8明黄褐色粘質土混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土

207-OO (第2-e区)



- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土多量混じり
10YR5/2灰黄褐色砂質土
(マンガン斑多含)

208-OO (第2-e区)



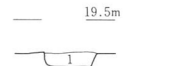
- 1: 10YR5/8黄褐色砂質土多量混じり
10YR5/2灰黄褐色砂質土

206-OS (第2-f区)



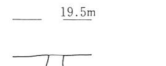
- 1: 10YR6/8明黄褐色粘質土多量混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土

210-OO (第2-f区)



- 1: 10YR6/8明黄褐色粘質土多量混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土

214-OP (第2-f区)



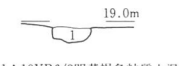
- 1: 10YR6/8明黄褐色粘質土少量混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
(10YR4/2灰黄褐色粘質土ブロック含)

212-OO (第2-g区)



- 1: 10YR4/6灰色粘質土少量混じり
2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 2: 10YR6/8明褐色粘質土多量混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土

217-OO (第2-i区)



- 1: 10YR6/8明黄褐色粘質土混じり
2.5Y6/3にぶい黄色粘質土
(マンガン斑多含)



303-OR (第3-a区)



- 1: 10YR5/6黄褐色粘質土混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 2: 2.5Y3/1黒褐色砂質土(細砂・木片含)
- 3: 2.5Y4/6オリブ褐色粘質土(砂礫含)
- 4: 2.5Y3/3暗オリブ褐色砂礫
- 5: 7.5GY5/1緑灰色砂質土(砂礫含)
- 6: 2.5Y5/6黄褐色砂礫

304-OX (第3-b区)



- 1: 2.5Y5/2暗灰黄色砂
- 2: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり2.5Y5/1黄灰色粘質土(マンガン斑含)
- 3: 2.5Y5/3黄褐色・10YR5/6黄褐色砂質土少量混じり2.5Y4/1黄灰色砂質土

303-OX (第3-c区)



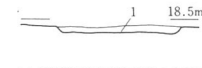
- 1: 2.5Y4/1黄灰色粘質土(小礫含)
- 2: 2.5Y6/1黄灰色粘質土(砂礫含)
- 3: 7.5YR4/4褐色粘質土混じり2.5Y5/1黄灰色粘質土
- 4: 10YR3/3暗褐色粘質土と10YR6/8明黄褐色粘質土との混合混じり
2.5Y4/3オリブ褐色粘質土
- 5: 7.5YR5/8明褐色粘質土少量混じり2.5Y4/3オリブ褐色粘質土
- 6: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり10YR4/2灰黄褐色粘質土

307-OO (第3-d区)



- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり
2.5Y5/2暗灰黄色粘質土(小礫多含)

308-OX (第3-d区)



- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり
10YR5/2灰黄褐色粘質土(小礫含)

306-OX (第3-c-d区)



- 1: 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土(砂礫含)
- 2: 10YR5/8黄褐色多量混じり2.5Y6/1黄灰色粘質土

第13図 第2・第3区主要遺構断面図

流路303-OR

第3-a区中央で検出した、幅約3.7～5.0m、深さ約0.4mを測る自然流路である。ほぼ東から西に流れる。横断面形は、北肩では二段掘り状、南肩では逆台形状を呈する。埋土は黒褐色砂質土、緑灰色砂質土ほかからなり、最下部に黄褐色砂礫が存在し、須恵器片（古墳後期）、土師器片（同）が若干出土した。遺物から古墳後期の所産と推定できる。

溝310-OS

第3-e区北半で検出した、幅約0.4～0.5m、深さ約0.1mを測る小溝である。ほぼ南南東―北北西に主軸をおく。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産と推定できる。

落ち込み状遺構304-OX

第3-b区北端で検出した、南北約2.5m以上、東西約0.8m以上、深さ約0.2mを測る、平面がほぼ北西―南西に主軸をおく溝状の落ち込み状遺構である。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色砂質土ほかからなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性がある。

落ち込み状遺構312-OX

第3-c区南端でごく一部を検出した、南北約0.5m以上、東西約0.4m以上、深さ約0.3mを測る、南方向への落ち込み状遺構である。横断面形はU字形状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性がある。

落ち込み状遺構309-OX

第3-e区南半で検出した、南北約8.5m以上、東西約1.0m以上、深さ約0.2mを測る、平面がほぼ北―南に主軸をおく溝状の落ち込み状遺構である。横断面形はU字形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性がある。

落ち込み状遺構305-OX

第3-c区南半でごく一部を検出した、南北約4.2m以上、東西約0.5m以上、深さ約0.15mを測る、平面がほぼ北―南に主軸をおく溝状の落ち込み状遺構である。流路302-ORに切られる。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土ほかからなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性がある。

落ち込み状遺構306-OX

第3-c区北半～第3-d区南端で検出した、南北約8.7m以上、東西約0.8m以上、深さ

約0.3mを測る落ち込み状遺構である。流路302-ORに切られる。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性はある。

落ち込み状遺構308-OX

第3-d区北端で検出した、南北約2.0m以上、東西約0.9m以上、深さ約0.1mを測る、平面がほぼ東一西に主軸をおく溝状の落ち込み状遺構である。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性はある。

土壌307-OO

第3-d区北半で東半部だけを検出した、南北約1.7m以上、東西約0.7m以上、深さ約0.15mを測る、平面が不整形の土壌状遺構である。横断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗灰黄色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性はある。

(4) 第4区 (第6・10・14図)

A 概要

上位遺構面で中世あるいは近世と推定できる自然流路1条、下位遺構面で弥生時代の可能性のある自然流路1条、古墳後期の自然流路1条、ピット1基等を検出した。

本調査区の出土遺物量は、流路403-ORをのぞいて多くはなく、全体でコンテナ箱で3箱である。内容では、弥生土器（中期か）、古墳時代～中世の土器類のほか、土錘（中世以降か）等がある。

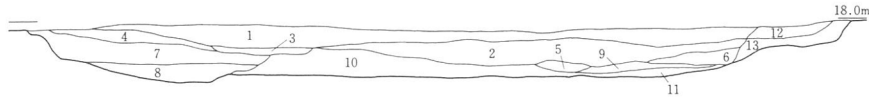
B 上位遺構面

流路401-OR

第4-a・b・f～i区で検出した、幅約1.1m以上、深さ約0.45m以上を測る自然流路である。ほぼ東北東から西南西に流れる。南岸部分だけの検出であるが、横断面形は幅広いU字形を呈する。埋土は暗オリーブ砂質土ほかからなり、土師器片（近世か）、陶器片（中世）、瓦質土器片（同）が若干出土した。中世後期あるいは近世の所産と推定できるが、第3区の流路302-ORと同様に現在も調査区に北接して流れる水路の前身遺構と考えてよい。現水路が第3区から第4区にかけて直角に方向を変えるので、検出した流路302-ORと流路401-ORも一連の遺構の可能性が強い。

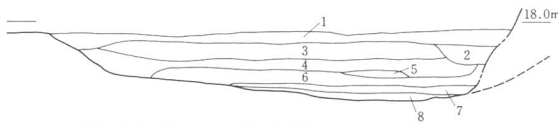
C 下位遺構面

403-OR(第4-c区)



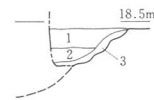
- | | |
|--|--------------------------------------|
| 1: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり2.5Y5/2暗灰黄色粘質土(マンガン斑含) | 8: 7.5Y5/2灰オリーブ色粘質土 |
| 2: 7.5YR5/8明褐色砂質土少量混じり10YR4/2灰黄褐色砂質土(砂部分的に含) | 9: 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂礫 |
| 3: 10YR4/2灰黄褐色粘質土(砂礫、木片・炭含む) | 10: 10YR3/4暗褐色砂礫 |
| 4: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり2.5Y5/2暗灰黄色粘質土(マンガン斑含) | 11: 2.5GY5/1オリーブ灰色砂質土(砂礫含) |
| 5: 7.5Y4/1灰色粘質土ブロック状に混じり7.5Y4/1灰色細砂 | 12: 7.5YR5/8明褐色粘質土少量混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土 |
| 6: 2.5Y4/1黄灰色粘質土(砂礫、植物遺体含) | 13: 10YR5/8明黄褐色粘質土混じり10YR5/1褐色粘質土 |
| 7: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり10YR5/2灰黄褐色粘質土 | |

406-OR(第4-f区)



- 1: 10YR5/8黄褐色粘質土混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 2: 7.5YR4/6褐色粘質土少量混じり10YR3/1黒褐色粘質土
- 3: 7.5YR5/8明褐色粘質土混じり2.5Y4/1黄灰色粘質土
- 4: 10YR5/8黄褐色粘質土少量混じり5Y4/1灰色粘質土
- 5: 10YR3/4暗褐色砂礫
- 6: 5Y3/1オリーブ黒色粘質土(細砂含)
- 7: 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂礫
- 8: 10GY5/1緑灰色砂質土

401-OR(第4-f区)



- 1: 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土
- 2: 5GY4/1暗オリーブ灰色砂質土
- 3: 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土少量混じり5Y6/1灰色粘質土



第14図 第4区主要遺構断面図

流路403-OR

第4-c区で検出した、幅約10.0m、深さ約0.8mを測る、やや規模の大きい自然流路である。ほぼ東から西に流れる。横断面形は浅く幅広のU字形状を呈する。埋土は、上層が暗灰黄色粘質土、中層が細砂混じり灰黄褐色砂質土、下層が暗褐色砂礫ほかからなり、上層下部から中層上部にかけて、須恵器片(古墳後期)、土師器片(同)が、完形品を含みコンテナ箱に約1箱出土した。これは、今回検出した遺構のなかで最も量が多い。遺物から古墳後期の所産と推定できる。なお、本流路は第3区の流路303-ORを延長させた下流部にあたる可能性がある。

流路406-OR

第4-f区で検出した、幅約5.0m、深さ約0.8mを測る自然流路である。ほぼ南から北に流れ、流路401-ORに切られる。横断面形は幅広のU字形状を呈する。埋土は、上層が黄灰色粘質土、灰色粘質土ほか、下層がオリーブ黒色粘質土、暗褐色砂礫、緑灰色砂質土ほかからなり、下層から弥生土器(中期か)の可能性のある破片が1、2点出土したにすぎない。遺物から弥生時代(中期か)の所産の可能性あるが、時期特定にやや疑問が残る。

土壌409-00

第4-h区西端で部分的に確認した、東西約0.4m、深さ約0.7mを測る土壌状遺構である。横断面形はU字形状を呈し、埋土は黄灰色粘質土からなる。遺物は出土しなかった。埋土の状況から中世の所産の可能性がある。

その他の遺構

上記以外に、第4-a区でピット402-OP、第4-d区でピット404・405-OPを検出した。うち、ピット404-OPから須恵器の体部小片が1点出土したが、いずれも時期比定の確定要素に欠ける。

第4節 出土遺物（第15～18図、第2表、図版12～14）

本調査の出土遺物は、整理用コンテナ（約54×34×15cm）にして約20箱である。所属時期としては、縄文晩期から近世・近代にまでおよぶ。今回の報告にあたっては、出土遺物量がさほど多くはなかったので、図化可能な遺物は極力図示することに努めた。従って、本書に掲載した遺物実測図の点数が、各時期の出土量をおおまかに反映しているといえる。その点数を記すと、縄文土器2点、弥生土器7点、縄文～弥生時代石製品4点、古墳時代土器類68点、古代（奈良・平安時代）土器類ほか11点、中世土器類ほか20点、近世土器1点、その他6点となる。したがって、最も多いのが古墳時代（中心は後期）、次いで中世の遺物である。

以下、遺構と遺構以外の出土品に分けて各区ごとに、図示遺物を中心に概要を述べる^(註3)。なお、遺物個々の法量、色調、胎土、調整・手法、焼成硬度、保存状態、遺存度などの観察結果は、本文末に観察表（第2表）を添付してあるので、詳細はそれを参照されたい。従って、本文での記載は、形態や文様等に重点をおき、観察表にある内容に関しては、特別な場合をのぞいて触れない。また、土器類の様式、型式、器種名ほかの記載基準は、主として、縄文土器では家根祥多氏の、弥生土器では小林行雄氏、佐原真氏ほかの、古墳時代では田辺昭三氏の、古代土器類では奈良国立文化財研究所ほかの、中世土器類では橋本久和氏ほかの区分内容に準拠する^(註4)。

（1）遺構出土（第15・16図）

A 第1区

落ち込み状遺構108-OX出土

土師器（１）、須恵器（２～６）、石製品（７）がある。

土師器は椀（１）で、底部と体部が明確な屈曲をもたずに、その境に低い断面三角形の高台が付く。瓦器である可能性もあるが、現状では土師器焼成になっている。

須恵器には杯蓋、杯、高杯、甗、広口壺がある。杯蓋（２）は天井が丸く器高の高い器形に推定でき、口縁と天井の境の外面には１条の沈線がめぐり、口縁端の内面には鈍い段をもつ。杯（３）は底体部の浅い器形に推定でき、口縁立ち上がりは外反しながら短くほぼ上方にのび、受け部は強く上方に湾曲する。高杯（４）は杯部の深い器形に推定できる無蓋器種で、杯体部の外面には沈線とシャープな突帯が各１状めぐり、口縁端の内面は鈍い凹面をもつ。甗（５）は大きく開く頸部片で、外面には波状文の退化した縦位の沈線状文で装飾され、その上下端には突帯と沈線がめぐる。広口壺（６）は外反する頸部片で、外面は２条の突帯の上位に精緻な櫛描き波状文で飾られる。

石製品はサヌカイト製の搔器（７）で、図示平面と裏面の一側辺に、リタッチによって刃部を形成する。他に図示しなかったが、サヌカイト剥片（長軸長1.1～1.4cm）が２点ある。

これらは、（１）が鎌倉末～室町初頭（14世紀前葉）、（２～６）が古墳後期（須恵器型式でMT15～TK43前後）、（７）が縄文時代（晩期か）の所産と推定でき、（２～７）は本遺構では混入遺物である。

落ち込み状遺構102-OX出土

須恵器の体部から剝離した把手（８）がある。小棒状の粘土紐を用いて手づくねで製作され、縦位の円環状に形成される。把手付き椀あるいは把手付き高杯であろう。古墳中期（須恵器型式でTK216前後か）の所産と推定できる。

他に図示しなかったが、混入品としてサヌカイト剥片（長軸長0.7～4.0cm）が５点ある。

土壙112-OO出土

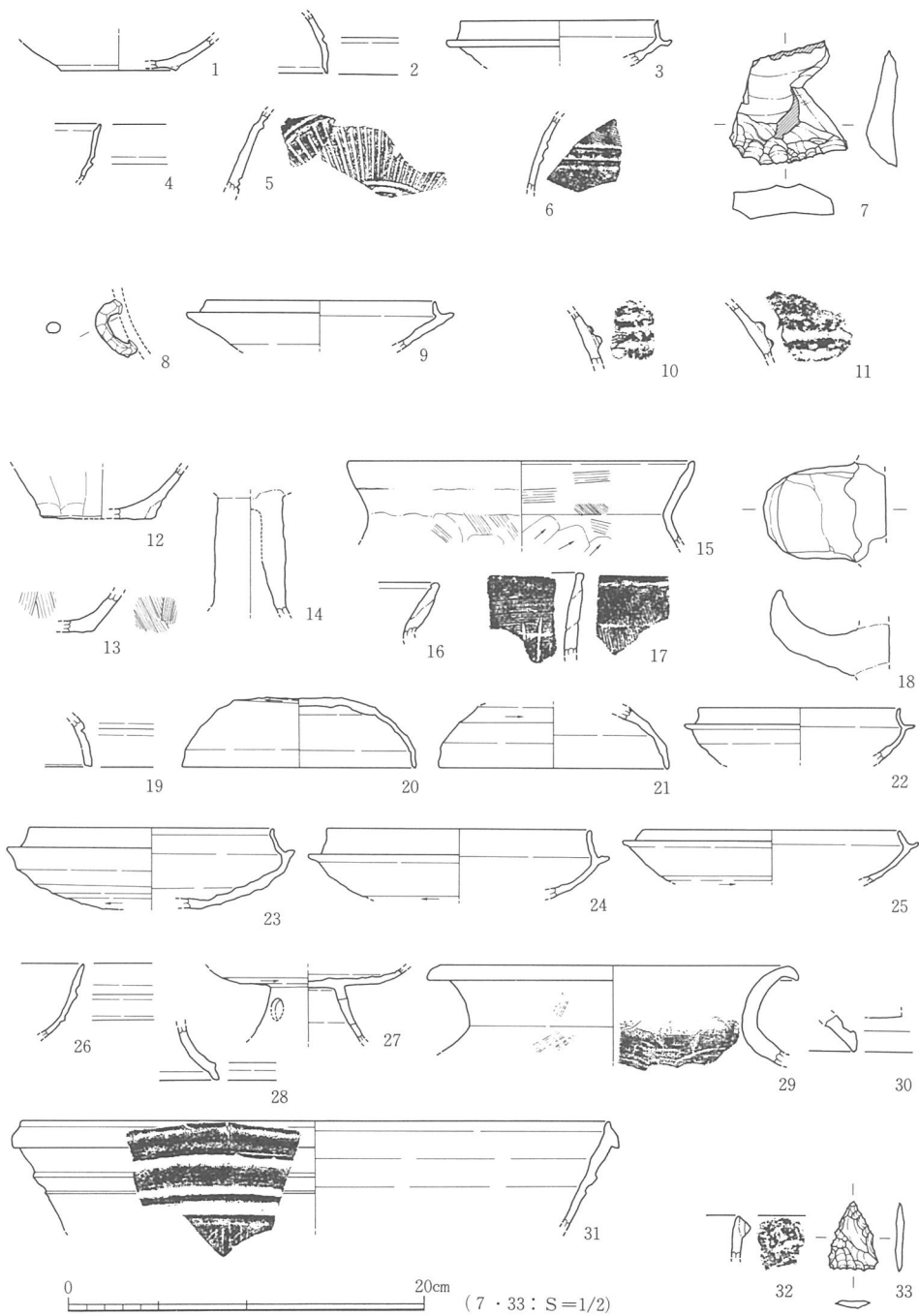
須恵器の杯（９）がある。底体部が直線的にのびる浅い器形に推定でき、口縁立ち上がりは外反しながら非常に短く上方に、受け部は短く上外方にのびる。

古墳後期（須恵器型式でTK209前後）の所産である。

他に図示しなかったが、混入品としてサヌカイト剥片（長軸長2.0cm）が１点ある。

溝113-OS出土

弥生土器の壺（10・11）がある。ともに体上部の破片で、外面には２条の貼付突帯がめぐる。突帯間は近接しており、（10）では２条一緒に貼り付けられている。この手法は、



108-OX(1~7) 102-OX(8) 112-OO(9) 113-OS(10・11) 115-OR(12~31) 111-OX(32・33)
 土師器(1・14~18) 須恵器(2~6・8・9・19~31) 石製品(7・33) 弥生土器(10~13)
 縄文土器(32)

第15図 遺物実測図・拓影-1(第1区遺構出土)

長門に分布の中心をもつ「複条貼付突帯文^(註5)」としたものに近い。突帯上にはいずれも刻目
が加えられる。

弥生前期（第Ⅰ様式新段階）の所産である。なお、本遺構からは、他に古墳後期の須恵
器の体部片が出土しているので、これらは混入品である。

他に図示しなかったが、サヌカイト剝片（長軸長1.1～3.6cm）が4点ある。

流路115-OR出土

弥生土器（12・13）、土師器（14～18）、須恵器（19～31）がある。

弥生土器には底部片（12・13）がある。ともに、薄い器壁で、平底から体部が上外方に
のび、外面には煤の付着がみられるので甕と推定できる。

土師器には高杯、甕、甑、把手がある。高杯（14）は筒状の脚軸部にあたる。甕（15・
16）はともに、体部から屈曲して口縁がやや内湾しながら上外方にのび、口縁端は内側に
わずかに肥厚する。甑（17）は口縁付近にあたり、口縁端はやや外傾する平坦面をもち、
内外面ともに粘土紐接合痕やハケメ調整が遺存したままで粗雑なつくりである。把手（18）
は上向きに取り付けられていて、甑に付くものと推定できる。

須恵器には杯蓋、杯、高杯、広口壺、脚台、器台がある。杯蓋（19～21）は、（19）で
は天井が丸く器高の高い器形に推定でき、（20・21）では天井がやや平らで器高の低い個
体である。口縁と天井の境の外面には、（19）では1条の沈線がめぐるが、（20・21）で
は屈曲して短い口縁が垂下するだけである。口縁端の内面には、前者では浅く鈍い凹面が
あるが、後者では丸くすなおにおわる。杯（22～25）は、（22～24）では、低体部のやや
深い器形に、（25）では浅い器形に推定できる。口縁立ち上がりは、前者では外反しなが
らやや長く、後者では短く直線的に上外方にのびる。受け部はいずれも水平もしくはやや
上方にのび、（23・24）では短く、（25）では湾曲する。（22）はやや小形で器壁が薄い
こともあり、有蓋高杯である可能性もある。高杯（26～28）は、口縁付近（26）、杯部基
底～脚上半（27）、脚端（28）がある。（26）の外面にはシャープな突帯が2条めぐり口
縁端は鋭くとがる。杯部の深い長脚の無蓋形態に推定できる。（27・28）は短脚高杯で、
（27）の脚上部には円形スカシ孔が穿たれ、（28）の脚端は外下方に拡張され端部は丸い。
広口壺（29）は体上端より上位にあたり、口頸は外反しつつ上外方にのび、口縁端は外側
に巻き込むようにして丸くおわる。脚台（30）の端部は上下にわずかに拡張され、その直
上にスカシ孔の基部がころうじて直線状に遺存する。脚台付き壺になろうか。器台（31）
は高杯形器台の口縁付近にあたる。体部は比較的直線的にのび、外面は1条の鈍い突帯が

めぐり、その下位は精緻な櫛描き波状文で飾られる。

これらは、(12・13)が弥生中期(第Ⅱ様式か)、(14~31)が古墳中期~後期(須恵器型式でMT15~MT85前後、主体はMT85)の所産で、弥生土器は、本遺構のなかでは下層から出土した。

落ち込み状遺構111-OX出土

縄文土器(32)と石製品(33)がある。

縄文土器は深鉢の口縁付近(32)にあたり、わずかに外反する体部の上端に接して外面に、断面三角形の突帯文がめぐる。突帯上には、O字形の刻目が加えられる。

石製品はサヌカイト製の平基三角形の石鏃(33)で、比較的粗いリタッチで製作される。長さ1.9cm、幅1.4cm、重さ0.4gをはかる。他に図示しなかったが、サヌカイト剥片(長軸長1.1~5.2cm)が22点ある。

これらは、(32)が縄文晩期(終末:長原式)の所産であり、(33)も同時期であろうか。

その他の遺構出土

上記の図示遺物以外では、遺構の項で述べたような状況で土器類等が出土している。サヌカイト剥片に関して記しておく、溝109-OSから1点(長軸3.1cm)、溝114-OSから1点(同6.2cm)、溝116-OSから5点(同1.0~2.9cm)、溝121-OSから1点(同3.0cm)の出土をみた。

B 第2区

溝202-OS出土

弥生土器の甕と体部片がある。甕(34)は口縁端の小片で、ゆるやかに外反して端部は先すばまりにすなおにおわり、外面には刻目が加えられる。体部片(35)は、判然としなないが器壁の薄さや湾曲具合から甕かと推定でき、胎土中に多くの角閃石を含む生駒山西麓産土器である。

これらは、(34)が弥生前期(第Ⅰ様式)の所産で、(35)も同時期であろうか。

溝203-OS出土

縄文土器の深鉢(36)がある。口縁付近にあたり、端部は先すばまりですなおにおわり、上端からわずかに下がった位置に、断面が低い三角形の突帯文がめぐる。突帯上には、O字形の刻目が加えられる。

縄文晩期の所産と推定できるが、終末の長原式より形態的にみて後出的な様相を示し、

胎土や色調も縄文土器とは異なり弥生前期土器に共通する。

C 第3区

溝301-OS出土

瓦器の椀（37・38）がある。口縁付近の（37）は、低い器高に推定でき、口縁端は丸くすなおにおわる。底部付近の（38）は、低い断面台形状の高台が付き、内面の見込み部には暗文の一部がかろうじて遺存する。

ともに鎌倉末～室町初頭（14世紀前半代）の所産であろう。

流路303-OR出土

須恵器の杯蓋と杯がある。杯蓋（39）は天井が平らで器高がやや低い器形に推定でき、天井と口縁の境は屈曲し、口縁端は丸くすなおにおわる。杯（40）は底体部の浅い器形に推定できる。口縁立ち上がりは外反しながら短くほぼ上方にのび、端部は先すぼまりにとがり、受け部は器壁が薄く短く上外方にのびる。

ともに古墳後期（須恵器型式でTK43前後）の所産である。

D 第4区

流路401-OR出土

土師器（41）、瓦質土器（42）、陶器（43）がある。

土師器は壺の口縁（41）かと推定できるが判然としない。

瓦質土器は摺鉢（42）で、体部はやや内湾しながら上外方にのび、口縁端は内外に若干拡張される。片口部が遺存しているが、体内面には卸目はない。地元の和泉産品である。

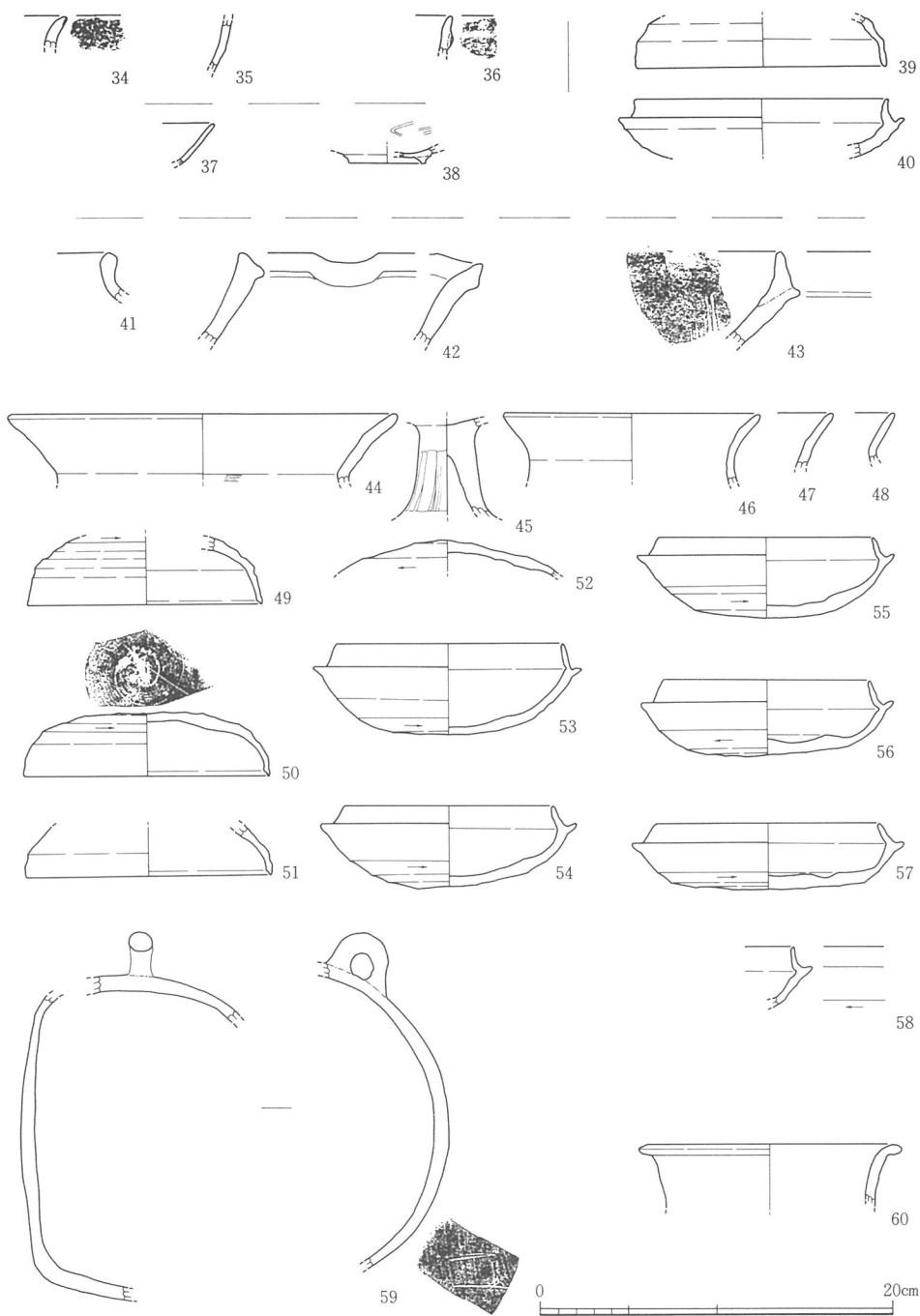
陶器は摺鉢（43）で、体部はほぼ直線的に上外方にのび、口縁端の外側はわずかにつまみ出され、内側は内上方に大きく拡張され立ち上がり部を形成する。体内面には卸目の上端が遺存する。備前焼である。

これらは、（41）が近世か、（42・43）が室町中頃（15世紀後半）の所産と推定でき、本流路の存続時期を示す。

流路403-OR出土

土師器（44～48）と須恵器（49～59）がある。

土師器には広口壺、高杯、甕がある。広口壺（44）は口縁で、外反しながら上外方にのび端部は丸い。高杯（45）は脚軸部にあたり、杯部底からわずかに開きながら外下方にのびる。甕（46～48）はいずれも口縁付近にあたり、（46・47）は外反しながら、（48）はほぼ直線的に上外方にのび、端部はいずれも先すぼまりで丸くおわる。



202-OS(34・35) 203-OS(36) 301-OS(37・38) 303-OR(39・40) 401-OR(41~43) 403-OR(44~59)
406-OR(60)

弥生土器(34・35・60) 縄文土器(36) 瓦器・瓦質土器(37・38・42) 須恵器(39・40・49~59) 土師器
(41・44~48) 陶器(43)

第16図 遺物実測図・拓影-2(第2~第4区遺構出土)

須恵器には杯蓋、杯、提瓶がある。杯蓋（49～52）には、天井がやや丸くて器高が高く、天井と口縁の境の外面に浅い凹線をもつ（49）、天井が比較的平らで器高が低く、凹線をもたず境は屈曲するだけの（50・51）がある。口縁端の内面には、3個体とも鈍い凹面を備える。天井だけの破片（52）では、頂部がやや突出する。（50）の天井頂には、現状で「一」状の焼成前ヘラ記号がある。杯（53～58）は、底が丸く器高の高い（53～55）と、底が平らで器高の低い（56・57）がある。口縁の内上方への立ち上がりは、ほぼ直線的な（53・57）とやや外反する（54～56）があるが、端部はすべて丸くおわる。受け部はいずれも短く上外方にのびる。（54・56）の底体内面には、黒褐色物質が厚く焼成後に付着している。使用時の内容物の痕跡を示す可能性があろうか。兩個体とも上向き状態で出土したが、内部には他に遺物は何も検出できなかった。小片の（58）も器高の低い類であろう。提瓶（59）は、直接は接合しないものの同一個体と思われる破片が数点ある。全形復原はできないが、片側面は平らで、反対側面への突出が比較的大きな個体と推定できる。把手は、いまだ環状の段階のものである。体基部の外面には、「二」状の焼成前ヘラ記号がある。

これらは、古墳後期（須恵器型式でTK10～MT85前後、主体はMT85）の所産である。他に図示しなかったが、混入のサヌカイト剥片（長軸長1.2cm）が1点ある。

流路406-OR出土

やや疑問が残るが、弥生土器の甕と推定できる（60）がある。口縁から体上部にあたる。体部はやや外反しながら上外方にのび、屈曲して短い口縁にいたり、端部は先すぼまりですなおにおわる。胎土中には、多くの結晶片岩粒が含まれており、紀伊産と考えられる。

弥生中期（第II様式）の所産かと推定できる。

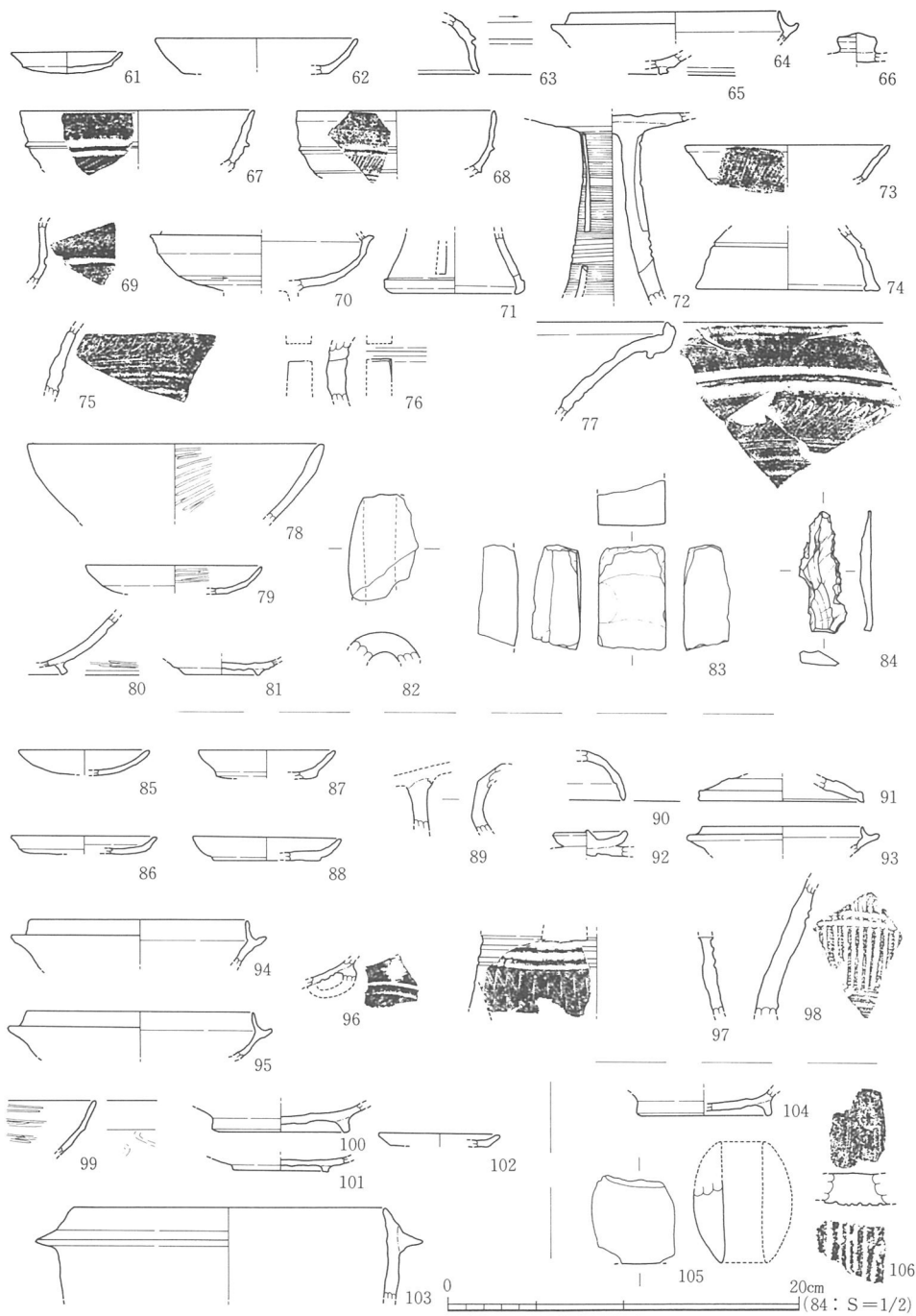
（2）遺構以外出土（第17・18図）

A 中世包含層

第1区出土

土師器（61・62）、須恵器（63～77）、瓦器（78～81）、土製品（82）、石製品（83・84）がある。

土師器には小皿と杯Aがある。小皿（61）は下方に突出した底部から、鈍い陵をなして口縁がほぼ直線的に上外方にのび、端部は丸い。杯A（62）は底端に明確な屈曲をもち、口縁が内湾しながら上外方にのび、端部は丸くおわる。形態は古代の須恵器杯Aに類似しており、須恵器模倣の土師器もしくは回転台土師器の類の可能性もある。



第1区(61~84) 第2区(85~103) 第3区(104~106)
 土師器(61・62・85~89) 須恵器(63~77・90~98) 瓦器・瓦質土器(78~81・99~103) 土製品(82・105) 石製品(83・84) 黒色土器(104) 瓦(106)

第17図 遺物実測図・拓影-3(各区中世包含層出土)

須恵器には杯蓋、杯、杯B、高杯、甌、脚台、広口壺、器台、甕がある。杯蓋(63)は器高が高い器形に推定でき、口縁と天井の境には各1条のシャープな突帯と沈線がめぐり、口縁端の内面には凹面をもつ。杯(64)は底体部の浅い器形に推定でき、口縁立ち上がりは外反しながら短く内外方にのび、受け部はやや湾曲する。杯B(65・66)は、底部付近(65)と蓋に付くつまみ(66)の小片がある。(65)では底端の外面には明瞭な陵をもち、底面の少し内側に寄った位置に断面方形の低い高台が付く。(66)はやや退化した宝珠形をなす。皿B蓋のつまみとなる可能性もある。高杯(67~72)の杯部では、無蓋形態(67~69)と有蓋形態(70)がある。前者には、杯部がやや低い(67)と深い(68)がみられる。ともに口縁端は先細りかつシャープで、外面は、鋭い突帯と櫛工具原体による斜位の刺突文で装飾される。(69)の外面には1条の沈線とその上位に細かい櫛描き波状文がめぐる。(70)の蓋受けは、短く上外方にのび、体外面は無文である。高杯の脚部には、短脚(71)と長脚(72)がある。(71)の脚端は内側に巻き込むように下方に垂下され、その上位に長方形のスカシ孔が穿たれる。(72)の脚軸には2段3方向の長方形スカシ孔があるが、上段のものは器壁を貫通していない。甌(73)は大きく開く口縁で、外面には斜位刺突文の退化した文様と思われる、ヘラ状工具による斜位の粗雑な平行線が施される。脚台(74)は、屈曲をもって外下方に開いて端部にいたり、端部は内外方に拡張される。屈曲部の外面には1条の沈線がめぐるが、現状ではスカシ孔や装飾はみられない。脚付き壺の脚台であろう。広口壺(75)は外反する頸部片で、外面は細かい櫛描き波状文で飾られる。器台(76)は脚筒の小片で、2条の沈線の上下に方形のスカシ孔が穿たれる。甕(77)は大形の外反する口頸にあたり、口縁端は下方に1条の突帯が貼り付けられるとともに、上方は大きく巻き込むように拡張される。頸外面には精緻な櫛描き波状文で飾られる。なお他に、小片のため図化できなかったが、陶質土器あるいは初期須恵器の可能性のある杯蓋状の口縁部小片が1点だけある。

瓦器には碗と小皿がある。碗の口縁付近(78)は器壁があつく、内湾しながら上外方にのび、端部は先すぼまりにおわる。碗の底付近片は、(80)では断面方形のやや高いしっかりとした高台が、(81)では断面三角形の低い退化した高台が付く。小皿(79)は底部からゆるやかに内湾して口縁にいたり、端部は先すぼまりで丸い。

土製品は土師質の管状土錘(82)である。大形で、推定最大径は約5cmになろうか。

石製品には、砥石とサヌカイト剥片がある。砥石(83)は砂岩製と考えられ、図示した3平面が研ぎ面として使用されている。サヌカイト剥片(84)は図示平面の一侧辺に、使

用痕の細かなりタッチがみられる。他に図示しなかったが、サヌカイト剥片（長軸長1.4～3.1cm）が10点ある。

これらは、(84)が縄文時代（晩期か）～弥生時代（前・中期か）、(63・64・67～77)が古墳後期（須恵器型式でT K 23・47～T K 43前後）、(65・66)が奈良時代（8世紀）、(62)が平安初期（9世紀前葉）、(78～80)が平安末～鎌倉初頭（12世紀後半～13世紀初頭）、(61・81)が鎌倉末～室町初頭（14世紀前半）の所産かと推定でき、(82・83)はこれらの時期内におさまるかと考えられる。

第2区出土

土師器（85～89）、須恵器（90～98）、瓦器・瓦質土器（99～103）がある。

土師器には小皿と高杯がある。小皿（85～88）は、底部と口縁の境が不明瞭で内湾しながら口縁端にいたる（85）、境がやや明瞭で口縁が短く外反して上外方にのびる（86）、底部が下方に突出して口縁がほぼ直線的にのびる（87）、内湾してのびる（88）がある。いずれも器高は低く、口縁端は先すぼまりにおわる。高杯（89）は脚軸部にあたり、外面に面取りをもつ。

須恵器には杯蓋、杯B蓋、杯、高杯、器台、甕がある。杯蓋（90）は天井部が丸く口縁がすなおにおわる。杯B蓋（91・92）には、低い笠形で口縁が屈曲しないで端部を外下方につまみ出す小形の（91）と、大形のつまみで、くぼんだ上面に山形の突出部をもつ（92）がある。後者は皿Bほかのつまみである可能性もある。杯（93～95）はいずれも底体部が浅い器形に推定でき、口縁立ち上がりは外反しながら、（93）では短く、（94・95）ではやや長く上外方にのびる。受け部は上方に短くのび、（94）はほぼ直線的で、（95）はやや湾曲する。高杯と推定したもの（96）は、環状把手の付く破片で、外面には2条の沈線がめぐり上位は精緻な櫛描き波状文で飾られる。無蓋形態で、杯部基底付近に環状把手が付く個体と推定できる。器台（97）は脚筒部にあたり、3条の沈線の上に方形あるいは三角形のスキャン孔が穿たれ、下方では細かい櫛描き波状文で装飾される。甕（98）は大形の頸基部にあたる。外反し、外面には2条の沈線がめぐり、縦位方向には粗いへら描き平行線文がみられる。

瓦器・瓦質土器には椀、小皿、釜がある。椀の口縁付近（99）は器壁が薄く、口縁端付近で屈曲をもち、端部は丸い。椀の底部付近は、（100）では断面長方形のやや高いしっかりとした外開きの高台が、（101）では断面台形状の低い高台が付く。小皿（102）は器高が低く、底部から屈曲して口縁が短く上外方にのび端部は丸い。釜（103）の体部は内

湾しながら上方にのび、口縁端は先すぼまりで丸い。外面の口縁部下には、断面三角形の鏝がほぼ水平にのびる。

他に図示しなかったが、サヌカイト剥片（長軸長1.3～8.0cm）が12点ある。

これらは、(90・93・94～98)が古墳中・後期（須恵器型式でT K216～T K217が主体）、(91・92)が奈良時代（8世紀）、(85～88・99～103)が鎌倉～室町前半期（13～15世紀）の所産と推定できる。

第3区出土

黒色土器（104）、土製品（105）、瓦（106）がある。

黒色土器は碗の底部付近（104）である。内面だけを黒色化処理したA類にあたり、断面が長方形のやや高い高台が付く。

土製品は土師質の管状土錘（105）である。大形で、推定復原での長軸約7cm、最大幅約5.5cmを測る。

瓦は平瓦の小片（106）で、凸面に縄目タタキ痕、凹面に布目痕をとどめる。今回の調査で中世以前にさかのぼる瓦類はこの1点だけである。

これらは、(104・106)が平安前期（9世紀前半）の所産かと推定できるが、(105)は、中世以前であるが時期は特定できない。

B その他出土

上記の遺構や中世包含層以外の諸層からの出土品や、側溝掘削時等の出土品を扱う。

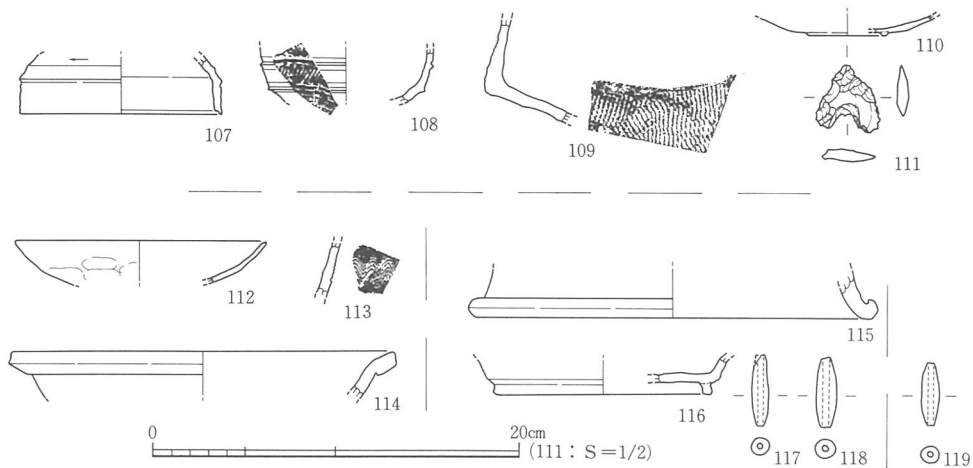
第1区出土

須恵器（107～109）、瓦器（110）、石製品（111）がある。

須恵器には杯蓋、高杯、壺がある。杯蓋（107）は天井が丸く器高の高い器形に復原できる。天井と口縁の境の外面には突帯と凹線がめぐり、屈曲して口縁がほぼまっすぐ下方にのび、口縁端内面には凹面をもつ。高杯（108）は無蓋形態と考えられ、杯部は丸く深い。外面には2条の突帯がめぐり、間は斜位の刺突文で飾られる。壺（109）は体部から頸部が屈曲してのびる。体外面には平行タタキがみられるが、内面のタタキ当て具痕はていねいに消される。

瓦器は碗の底部付近（110）で、低平で粗雑な退化した高台が付く。

石製品はサヌカイト製の石鏝（111）である。基部のえぐりがかなり深い雁又式にあたる。長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gをはかる。他に図示しなかったが、サヌカイト剥片（長軸長2.7～3.0cm）が2点ある。



第1区 (107~111) 第2区 (112~114) 第3区 (115~118) 第4区 (119)

須恵器 (107~109・113~116) 瓦器 (110) 石製品 (111) 土師器 (112) 土製品 (117~119)

第18図 遺物実測図・拓影-4 (各区その他出土)

これらは、(111)が縄文時代(晩期か)、(107~109)が古墳中・後期(須恵器型式でTK23~TK43が主体)、(110)が室町初期(14世紀中頃)の所産と推定できる。

第2区出土

土師器(112)、須恵器(113・114)がある。

土師器は杯(112)で、器高の低い形態を呈する。底部と口縁の境は不明瞭で、口縁は内湾し端部は丸い。

須恵器は壺(113・114)である。(113)は体部片で外面に櫛描き波状文で飾られる。(114)は大きく外反する口縁で、端部は外側に方形に肥厚されシャープなつくりである。

他に図示しなかったが、サヌカイト剥片(長軸長3.4cm)が1点ある。

これらは、(113)が古墳後期(須恵器型式でMT15~TK10)、(114)が古代、(112)が平安後半期(11世紀中頃)の所産と推定できる。

第3区出土

須恵器(115・116)、土製品(117・118)がある。

須恵器には、脚台と皿Bがある。脚台(115)は、最下端に接地面があるので脚台としたが、壺・甕類の口縁である可能性も否定できない。端部は外側に巻き込んで仕上げられ

る。皿B（116）は底端が陵をもって明示され、底面の少し内側に寄った位置に断面が方形で外開きの高台が付く。口縁はやや外反しながら上外方にのびる。口縁端は欠損するが内面の端部の一部が遺存しているので皿Bにまちがいないが、通常の本器種に比べて口径が小さい。

土製品は土師質の管状土錘（117・118）である。ともに小形品で、長軸長、最大幅、重さは、（117）が3.9cm、0.9cm、2.2g、（118）が3.9cm、1.2cm、4.1gをはかる。

これらは、（115）が古墳後期、（116）が奈良後半期（8世紀後半）の所産と推定できるが、（117・118）の時期は特定できない。

第4区出土

土製品（119）がある。土師質の管状土錘である。小形品で、長軸長3.4cm、最大幅1.0cm、重さ2.6gをはかる。

時期は特定できない。

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査成果を時期ごとにふりかえり、まとめにかえたい。

最も時期のさかのぼる人為的痕跡は、縄文晩期（突帯文期：長原式）～弥生前期（第Ⅰ様式新段階）である。この時期の遺構は第Ⅱ区西端部より南側で検出でき、遺物もこの範囲での出土が多い。ただし、遺構の内容は、集落本体部と予想できるものではなく、集落の縁辺の様相をみせる。既往の調査でも明らかのように、当該期の集落中心部は今回の調査区のさらに南、つまり本遺跡の中央西端部域に拡がると推定できるので、今回は集落北辺の一端を明らかにできたことになる。この範囲で縄文晩期の長原式と弥生前期の遺構・遺物が混在して確認できた点は、当地域の弥生時代の開始をめぐる問題において一定資料になろう。

和泉地域でのこれまでの調査では、この三軒屋遺跡^(註6)をはじめ船岡山遺跡B地点^(註7)、上遺跡^(註8)において、突帯文土器（長原式）と弥生前期でも新段階土器が相伴しており、前期の古・中段階と相伴する近畿中心部（河内地域ほか）における状況とは異なったあり方が説かれている^(註9)。今回の調査では、両土器型式の明確な相伴関係を示す証左はなかったが、和泉地域における上の説、つまり長原式と第Ⅰ様式新段階との時間的な平行関係を補強する成果であるともいえる。またこれらの状況から、本地域への水稲耕作の伝播は、遠賀川式土器集団が単独で移り住んで開始されたのではなく、在来の縄文系集団との密接な関係のうえに達成されたといえる。

弥生中期では、この時期の可能性のある土器片が自然流路中から1、2点確認できただけで、明確な痕跡は検出できなかった。本遺跡内において弥生中期遺構が多く報告されているのは遺跡の中央東半部域に集中しているので、今回の調査箇所は基本的に弥生中期の集落や墓域の範囲外と推定できる。第Ⅰ区流路115-ORからは、後掲のようにイネ科花粉が多く検出されていることから、周辺部には生産域（水田）が存在した可能性もある。

弥生後期～古墳前期でも遺構や遺物は全く確認できなかったのも、弥生中期と同状況であろう。

古墳中・後期では、縄文晩期～弥生前期の様相に類似して、調査区の南半部を中心にして自然流路や湿地状遺構、溝等を検出した。これも集落の縁辺的なあり方を示す。花粉分析の成果からは、水田域であった可能性もある。ただし、周辺に集落域としての実態を示

す遺構等がないにもかかわらず、第1区流路115-ORと第4区流路403-ORからは、完形品を含む一定量の古墳後期土器類が出土しており、この出土状況に一定の意味がある可能性もあろうか。また、包含層出土品を含めてみると、一般集落ではあまり出土しない、器台、脚台付き壺、提瓶等の器種がみられる点も注意される。^(註10)なお、これまで本遺跡で顕著であるといわれてきた陶質土器は、可能性のある小片以外は確実な出土はみられなかった。

古代では、遺構は全く検出できなかったが、奈良・平安時代の土器類を中世包含層に混入した状態で若干確認している。周辺部で今後、この時期の集落等が確認される蓋然性が高い。また、1点といえども古代の瓦片が出土しているのは、近辺の禅興寺との関連性や、瓦が本遺跡でも中央東半部で比較的多く確認されている現象と関連して注意される。

中世では、中世包含層の上面と下面で遺構面を検出できた。各遺構に共伴した遺物が少なかつたこともあって明言できないが、下面遺構は中世前半期、上面遺構は中世後半期に主体をおく時期の所産と推定できる。両遺構面ともに遺構内容や出土遺物量から集落の存在を示唆するものではない。おそらく耕作地として利用されていたのであろう。なお、中世包含層は、出土遺物には13世紀末～14世紀前半の資料が多いが、15世紀代の遺物を下限とすることから、室町前半期に形成されたと推定できる。

近世では、第3・第4区で自然流路の片側の岸を検出した。これは、現在も同所に流れる主要水路の近世における姿である。

なお、現存する条里地割りの起源を追究しうる遺構等は全く確認できなかった。

上述のように今回の調査では、連続的な平面調査が不可能でまた攪乱部が多かつたので必ずしも十分な調査は実施できなかったが、縄文晩期～中・近世の多くの痕跡を検出できた。また、時期ごとの遺構・遺物の分布域を一定程度明らかにできた点は成果としてあげられる。

註

(註1) 三軒屋遺跡に関する主要な文献には以下のものがある。

①藤田正篤「榎井川「三軒屋」遺跡見つかる」(和泉古代文化研究会『会報』5)

1971年

②大斗木遺跡調査グループ「大斗木遺跡発掘調査概報」(和泉古代文化研究会

『会報』6) 1971年

- ③藤田正篤「三軒屋大斗木遺跡その後」（和泉古代文化研究会『会報』6）1971年
- ④藤田正篤「三軒屋大斗木遺跡その後（続）」（和泉古代文化研究会『会報』7）1971年
- ⑤泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（三軒屋遺跡調査グループ）1972年
- ⑥泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡－昭和54年度の調査－』1980年
- ⑦泉佐野市教育委員会『泉佐野市所在遺跡発掘調査概要』I 1981年
- ⑧泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡－82－1区の調査－』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』II）1982年
- ⑨泉佐野市教育委員会『昭和56年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』II 1982年
- ⑩泉佐野市教育委員会『昭和58年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』IV 1984年
- ⑪泉佐野市教育委員会『昭和59年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』V 1985年
- ⑫泉佐野市教育委員会『昭和60年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』VI 1986年
- ⑬泉佐野市教育委員会『昭和61年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』VII 1987年
- ⑭大阪府教育委員会『昭和61年度 三軒屋遺跡発掘調査概要』1987年
- ⑮泉佐野市教育委員会『昭和62年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』VIII 1988年
- ⑯大阪府教育委員会『三軒屋遺跡発掘調査概要・III』1989年
- ⑰松尾信裕「和泉地方における縄文時代晩期終末の様相」（財大阪府埋蔵文化財協会『財大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』I）1988年
- ⑱泉佐野市教育委員会『昭和63年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』IX 1989年
- ⑲財大阪府埋蔵文化財協会『三軒屋遺跡』（『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』47）1989年
- ⑳森屋直樹「三軒屋遺跡」（韓式土器研究会『韓式土器研究』II）1989年
- ㉑泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡 89－4区の調査』1990年
- ㉒泉佐野市教育委員会『平成元年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』X 1990年
- ㉓泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡 89－6区の調査』1990年
- ㉔泉佐野市教育委員会『平成2年度 泉佐野市埋蔵文化財調査概要』1991年
- ㉕泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡発掘調査現地説明会資料』1991年
- ㉖鈴木陽一「長滝地内発見の古墳跡について」（泉佐野市教育委員会『文化財情報 茅渟の道』1）1991年

㉗重金誠「三軒屋遺跡出土の陶質土器」（泉佐野市教育委員会『文化財情報 茅渟の道』1）1991年

㉘泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財調査概要』平成3年度 1992年

㉙泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡発掘調査報告書-91-1区の調査-』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』20）1992年

㉚泉佐野市教育委員会『三軒屋・諸目遺跡発掘調査概要』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』30）1992年

㉛泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財調査概要』平成4年度 1993年

㉜泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡-92-9区の調査-』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』34）1993年

㉝泉佐野市教育委員会『三軒屋・ダイジョウ寺遺跡-92-1区の調査-』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』35）1993年

㉞泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡-92-14、92-15区の調査-』（『泉佐野市埋蔵文化財調査報告』36）1993年

㉟泉佐野市教育委員会『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要』第15号 1993年

㊱鈴木陽一「泉佐野市内の石棒について」（泉佐野市教育委員会『文化財情報 茅渟の道』第2号）1993年

㊲泉佐野市教育委員会『泉佐野の遺跡-原始・古代編-』（『泉佐野の歴史と文化財』2）1993年

（註2）第1図および以下の記載における各遺跡に関する報文は、（註1）にあげた諸文献のほか、田中一廣『大西・中開遺跡』II（財大阪府埋蔵文化財協会『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』76）1993年に文献抄録が掲載されているので、それを参照されたい。また、最近の調査データに関しては、泉佐野市教育委員会鈴木陽一・中岡勝両氏、泉南市教育委員会仮屋喜一郎・岡田直樹両氏のご教示による。

（註3）主として中世以降の遺物の評価にあたっては、大阪府教育委員会佐久間貴士氏、財大阪府埋蔵文化財協会藤田憲司・駒井正明・地村邦夫の各氏からご教示を得た。

（註4）①家根祥多「晩期の土器 近畿地方の土器」（雄山閣『縄文文化の研究』4 縄文土器II）1981年

②家根祥多「縄文土器」（財大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』II）

1982年

③末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究室『京都帝国大学文学部考古学研究報告』16）1943年

④佐原真「畿内地方」（東京堂『弥生式土器集成』本編2）1968年

⑤井藤暁子「入門講座 弥生土器 近畿」（ニューサイエンス社『月刊考古学ジャーナル』195・202・205・207・219）1981～83年

⑥田辺昭三『陶邑古窯跡群』I（平安学園考古クラブ）1966年

⑦田辺昭三『須恵器大成』（角川書店）1981年

⑧奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VII 1976年

⑨奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』XI 1982年

⑩古代の土器研究会『都城の土器集成』（『古代の土器』1）1992年

⑪古代の土器研究会『都城の土器集成』II（『古代の土器』2）1993年

⑫橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』（高槻市教育委員会）1980年

⑬伊能近富「中世土器研究に関する基礎文献（1）」（京都考古刊行会『京都考古』54）1990年に示された各種文献。

（註5）秋山浩三「弥生前期土器一遠賀川式土器の地域色と吉備一」（山陽新聞社『吉備の考古学的研究』上）1992年

（註6）（註1）⑪文献ほか。

（註7）泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』1985年

（註8）大阪府教育委員会『上遺跡発掘調査概要』1985年

（註9）①（註1）⑰文献。

②藤田憲司「稲作の始まるとき」（埋蔵文化財研究会『埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 究班』）1992年

（註10）今回の第1区の近接地で実施された泉佐野市教育委員会の調査においても、出土品を拝見したかぎりでは器台等の器種の出土が顕著である。

第2表 出土遺物観察表

図・図版番号は第15～18図、図版12～14のもの

※最大粒度長、()内は普遍的なものうちの最大粒度長

※※石：石英、長：長石、チ：チャート、雲：黒雲母、赤：赤色斑粒、角：角閃石、片：結晶片岩、白：白色粒、黒：黒色粒、原則として量の多い順に表記

調整・手法は原則として、先行するものから表記

遺構名ほか	種類	図・図版番号	器種	法量(cm) 〔〕:埋定、():残高 口径 器高 底脚高	色調 外表面 内表面 断面	胎土 素質/鉱物等の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・外表面 ・内表面	焼成度 硬 度 遺存 状態	残存度 口縁 底脚	備考	
108 OX	土師器	1	碗	— (1.9) 〔 6.4〕	淡橙白褐色 淡橙白褐色 淡橙白褐色	やや粗/やや多/8(1)■/ チ・石・長	・不明 ・不明	硬劣	— 1/3		
			須恵器	杯蓋	— (3.3) —	淡灰色 淡灰色 淡灰色	やや粗/少/1(0.5)■/白 (石)・黒	・不明 ・不明	やや軟劣	極小	—
				杯	〔11.0〕 (2.5)	青灰色 暗青紫灰色 青灰色	やや粗/少/2(0.5)■/白 (長・石)・チ	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟良	極小	—
				高杯	— (3.1) —	暗灰～青灰色 暗灰～青灰色 灰～暗灰色	緻密/少/3(0.5)■/黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	極小	内面は自然釉によって黒灰色化
				甕	— (4.6) —	淡灰色 暗灰色 淡灰色	緻密/少/3(0.5)■/白 (石・長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	—	外面の一部と内面の全体は自然釉で黒灰色化
				広口壺	— (4.0) —	暗灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)■/白(石)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	—	外面は自然釉で暗灰色化
	石製品	7	搔器	(長 3.6) (幅 3.4) (厚 0.8)	淡灰色 淡灰色 黒灰色			—良	—	サヌカイト製	
102 OX	須恵器	8	(把手)	— (3.3) —	灰色 灰色 灰色	やや粗/少/0.5■/黒・白	・ナデ、指圧痕 ・ナデ、指圧痕	硬良	—	碗または高杯か	
			112 OO	9	杯	〔12.9〕 (2.7) —	灰色 灰色 淡青紫灰色	緻密/少/2(0.5)■/黒・白(長)	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ	硬良	1/12
113 OS	弥生土器	10	壺	— (3.0) —	淡灰白褐色 褐色 褐色	緻密/やや多/3(2)■/チ(多)・石・長	・不明 ・ナデか	硬劣	—	—	
			11	壺	— (3.2) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐～灰色	緻密/やや多/4(2)■/チ(多)・石・長	・不明 ・ナデか	硬劣	—	10と同一個体の可能性あり
115 OR	土師器	12	甕か	— (3.0) 〔 6.1〕	淡灰褐色 淡灰褐色 淡灰褐色	緻密/やや多/2(0.5)■/長・石・雲・赤	・ナデか ・ナデか	硬劣	—	体外面の一部に煤付着	
			13	甕か	— (2.2) —	淡橙褐色 淡橙褐色 淡橙褐色	やや粗/少/2(0.5)■/石・チ・赤	・ハケメ、ナデ ・ハケメ	やや軟良	—	体外面の一部に煤付着
	土師器	14	高杯	— 〔 7.6〕 —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	緻密/少/3(1)■/チ(多)・石・長	・ナデ、ヘラミガキか ・ナデ	硬 やや劣	—	—	
		15	甕	〔19.4〕 (4.8) —	淡灰白褐色 淡灰白褐～淡橙褐色 淡灰白褐～淡橙褐色	やや粗/少/3(0.5)■/石・長・赤	・ハケメ、ヨコナデ、指圧痕 ・ハケメ、ヘラケズリ、ヨコナデ	やや軟 やや劣	1/10	外面の一部に煤付着	
		16	甕	— (3.2) —	淡灰橙褐色 淡灰橙褐色 淡灰橙褐色	緻密/少/1(0.5)■/赤・長	・ハケメ、ヨコナデ ・ハケメ、ヨコナデ	硬 やや劣	—	—	

遺構名ほか	種類	図・図版番号	器種	法量(㎝) ()推定()残高 口径 器高 底脚径	色調 外面 内面	胎土 素質/鉱物等の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・外面 ・内面	焼成度 硬 遺存 状態	残存度 口縁 底脚	備考
115 OR	土師器	17	甗	— (4.7) —	淡褐色 淡褐色 淡灰橙褐～褐色	やや粗/少/1(0.5)■/長・雲・赤	・ハケメ、ヨコナデ ・ハケメ、ヘラあたり	硬良	極小	外面の一部に煤付着
			(把手)	— (5.0) —	淡白橙色 淡白橙色 淡白橙色	やや粗/少/4(0.5)■/石・長・チ	・ナデ、指圧痕 ・ナデか	硬 やや劣	— —	甗か
	須恵器	19	杯蓋	— (2.8) —	淡灰色 淡青灰色 淡灰紫色	緻密/ほとんどなし/1(0.5)■/黒・白	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	極小	外面は自然釉で黒灰色化
			杯蓋	13.1 3.9 —	灰～淡灰色 淡青灰色 —	緻密/少/6(1)■/黒・白(石・チ)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	完形	口縁外面は自然釉で暗灰色化
		21	杯蓋	[13.0] (3.5) —	淡紫灰色 淡灰色 淡灰赤紫色	緻密/少/3(0.5)■/白(長・石)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	約1/5	—
		22	杯	[11.5] (3.2) —	淡灰～灰色 淡灰～灰色 灰色	やや粗/少/4(1)■/白(石)・チ・黒(細)	・回転ナデ ・回転ナデ、ナデ	硬良	約1/6	高杯の可能性もあり
		23	杯	[13.8] (4.6) —	青灰～暗灰色 青灰色 青灰色	やや粗/少/4(1)■/白(石)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	約1/3	—
		24	杯	[15.0] (4.0) —	青灰～暗灰色 青灰色 青灰色	やや粗/やや多/4(1)■/黒・白(石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	やや軟良	約1/7	—
		25	杯	[14.4] (2.9) —	灰色 暗灰色 灰～暗灰色	緻密/やや多/5(1)■/白(石・長)・チ・赤	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	約1/12	—
		26	高杯	— (4.3) —	暗灰色 暗灰～濃灰色 淡灰紫色	緻密/少/1(0.5)■/白(石・長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	極小	口縁外面に暗茶緑自然釉、杯部内面に灰白色自然釉付着
		27	高杯	— (4.1) —	青灰色 淡灰色 淡灰～灰赤紫色	緻密/少/3(1)■/白(石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	—	脚外面の一部に灰白色自然釉付着
		28	高杯	— (3.2) —	淡青灰色 淡青灰～淡灰色 淡青灰色	やや粗/少/3(0.5)■/白(石・長)・黒(細)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	— 極小	—
		29	広口壺	[19.6] (5.4) —	灰色 灰色 灰色	緻密/少/6(1)■/白(長・石)・黒	・タタキ、カキメ、回転ナデ ・タタキ当具痕、回転ナデ、ナデ	やや軟良	約1/7	—
		30	(脚台)	— (2.0) —	暗灰色 暗灰～濃灰色 淡灰色	緻密/少/1(0.5)■/白(長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	— 極小	外面は自然釉で暗灰色化、脚台付壺か
31	器台	[33.2] (6.2) —	淡紫灰色 淡紫灰色 淡灰紫色	緻密/少/4(1)■/白(石・長)・チ	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 やや劣	約1/9	外面の一部は自然釉で暗灰色化		
111 OX	縄文土器 石製品	32	深鉢	— (2.4) —	黒褐色 黒褐色 黒褐色	緻密/やや多/3(1)■/石・長	・不明 ・ナデか	硬劣	極小	—
33			石鏝	長1.9 巾1.4 厚0.2 重0.4g	濃灰色 濃灰色 黒色	—	—	— やや劣	完形	サヌカイト製
202 OS	弥生土器	34	甗	— (1.7) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	緻密/やや多/4(1)■/チ(多)・石・赤	・ナデか ・ナデか	硬劣	極小	—

遺構名ほか	種別	四・四版番号	器種	法量(cm) () : 推定() : 残高 口径 器高 底脚径	色調 外表面 内表面 断面	胎土 素質/鉱物等の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・ 外面 ・ 内面	焼成度 硬度 遺存状態	残存度 口縁 底脚	備考
202 OS	弥生土器	35	甕か	— (3.0) —	暗茶褐色 暗茶褐色 暗茶褐色	やや粗/やや多/2(1)■/ 角(多)・雲・長	・ナデか ・ナデ	やや軟 劣	— —	生駒山西麓 産胎土
203 OS	縄文土器	36	深鉢	— (2.0) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粗/やや多/3(1)■/ チ(多)・石	・ナデ ・ナデ	硬 劣	— —	弥生土器と 胎土は共通
301 OS	瓦器	37	椀	— (2.3) —	黒灰色 黒灰色 灰白色	やや粗/少/1(0.5)■/チ・ 長・石	・ナデか ・ナデか	硬 劣	極小 —	
		38	椀	— (0.9) 〔 2.4 〕	黒灰色 黒灰色 灰白色	やや粗/少/2(0.5)■/石・ チ	・ナデ、ヘラミガキ ・ナデ	硬 やや劣	— 1/4	
303 OR	須恵器	39	杯蓋	[13.9] (2.9) —	暗青灰~濃灰色 暗青灰~濃灰色 灰色	緻密/少/4(0.5)■/白 (長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/10 —	
		40	杯	[14.2] (3.3) —	暗青灰色 暗青灰色 灰色	緻密/少/2(0.5)■/白 (長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/5 —	
401 OR	土師器	41	甕か	— (2.6) —	濃黄褐色 濃黄褐色 濃黄褐色	緻密/少/4(2)■/石・チ	・ナデか ・ナデか	硬 劣	極小 —	
	瓦質土器	42	摺鉢	— (5.2) —	暗灰色 暗灰~灰色 淡灰色	やや粗/少/8(1)■/白 (長)・チ	・ナデか ・ナデか	やや軟 やや劣	極小 —	
	陶器	43	摺鉢	— (5.3) —	橙茶褐色 橙茶褐色 灰褐色	緻密/少/4(1)■/黒(多)・ 白(長)	・回転ナデ、ナデ ・回転ナデ	硬 良	極小 —	
403 OR	土師器	44	甕	[22.0] (3.9) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粘/やや多/3(0.5)■/ チ・石・赤	・ナデ、ヨコナデ ・ハケメ、ナデ、ヨコナデ	やや軟 劣	1/2 —	口縁内面に 黒斑あり
		45	高杯	— (5.2) —	灰褐色 淡灰褐色 淡灰褐色	やや粗/やや多/8(1)■/ チ(多)・石・長	・ハケメ、ヘラケズリ、ナデ ・ナデ	硬 やや劣	— —	外面の一部 に煤付着
		46	甕	[14.6] (3.8) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	緻密/少/4(0.1)■/チ・ 石・長・赤	・不明 ・不明	やや軟 劣	1/4 —	口縁内外面 に煤付着
		47	甕	— (3.1) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粘/やや多/4(0.5)■/ 赤・石・長・チ	・不明 ・不明	やや軟 劣	極小 —	
		48	甕	— (2.8) —	淡褐色 淡褐色 淡褐色	やや粘/少/3(1)■/長・ 石・赤	・不明 ・不明	やや軟 劣	極小 —	内外面に煤 付着
	須恵器	49	杯蓋	[13.2] (3.8) —	濃灰色 暗灰~暗褐色 暗褐色	緻密/少/2(0.5)■/白 (石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	やや軟 良	1/10 — 極小	外面の一部 に灰白色自 然釉付着
		50	杯蓋	[13.9] (3.6) —	暗灰色 暗青灰色 暗青灰色	緻密/少/4(1)■/白(長・ 石)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬 良	極小 —	天井外面に ヘラ記号あ り
		51	杯蓋	[13.9] (2.7) —	暗青灰色 暗褐色 暗褐色	緻密/少/6(1)■/白(石・ 長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	1/8 —	
		52	杯蓋	— (2.1) —	暗灰色 暗青灰色 暗青灰色	緻密/少/8(1)■/白(石・ 長)・黒	・回転ヘラケズリ ・回転ナデ	やや軟 良	— —	
		53	杯	12.8 5.1 —	灰白色 灰白色 灰白色	緻密/少/8(1)■/白(長)・ 黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	非常に 軟 劣	2/3 —	

遺構名ほか	種類	器種	法量(㎝) ()推定()残高 口径 器高 底脚径	色調		胎土 素質/鉱物等の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・外面 ・内面	焼成度 遺存状態	残存度 口縁 底脚	備考
				外面	内面					
403 OR	須恵器	杯	11.8 4.5 —	灰色 灰色 灰色	緻密/少/3(0.5)■/白 (石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬劣	完形 —	内底面に黒褐色物質付着	
		杯	12.2 4.5 —	暗青灰～暗紫灰色 青灰色 淡紫褐色	緻密/少/5(1)■/白(石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	ほぼ 完形 —		
		杯	11.8 4.2 —	青灰～淡紫紫色 青灰色 青灰～淡紫紫色	緻密/少/6(0.5)■/白 (石・長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	完形 —	外面の一部に緑灰色自然釉付着、内底面に黒褐色物質付着	
		杯	[12.6] 3.7 —	青灰～灰色 淡青灰色 淡青灰色	やや粗/少/4(1)■/白 (石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬良	1/4 —	受部上面に重焼痕あり、外面の一部は自然釉で黒灰色化	
		杯	— (3.4)	青灰色 青灰色 青灰色	緻密/少/8(1)■/白(石・長)・黒	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	極小 —		
		提瓶	— (17.2)	暗青灰色 青灰色 赤紫色	緻密/少/3(1)■/白(石)	・タタキメ、カキメ、回転ナデ、ナデ ・タタキ当具痕、回転ナデ、ナデ、指圧痕	硬良	— —	外面の一部に灰白色自然釉付着、外側面下部にヘラ記号	
406 OR	弥生土器	甕	[15.2] (3.5) —	淡赤橙褐色 淡赤橙褐色 淡赤橙褐～淡褐色	やや粗/多/4(2)■/片 (非常に多)、石・チ・赤	・ナデか ・不明	硬劣	1/10 —	内面の一部に黒斑あり	
中世包含層	土師器	小皿	[6.2] (1.2) [5.1]	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色	やや粗/少/1(0.5)■/チ・石	・ナデか ・ナデか	やや軟劣	1/6 —	1-k区出土	
		杯A	[11.6] (2.0) [8.3]	淡灰白黄褐色 淡灰白黄色 淡灰白黄色	緻密/少/4(0.5)■/赤・チ	・ナデか ・ナデか	やや軟劣	1/6 —	1-k区出土	
	須恵器	杯蓋	— [3.4] —	淡青灰色 淡青灰色 紫灰色	緻密/ほとんどなし/1(0.5)■/白(長)	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ	硬良	極小 —	1-j区出土、口縁外面に灰白色自然釉付着	
		杯	[14.0] (1.8) —	淡灰～灰白色 淡灰～灰白色 淡灰～灰白色	やや粗/少/3(1)■/白(長)・黒・チ	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 やや劣	極小 —	1-j区出土	
		杯B	— (1.1) [10.8]	濃灰色 灰色 灰色	やや粗/少/1(0.5)■/白(長)	・回転ナデ ・回転ナデか	硬劣	— —	1-j区出土	
		杯B蓋	— (1.6) —	濃灰色 濃灰色 濃灰色	やや粗/少/2(0.5)■/白(長)・黒	・回転ナデ ・ナデか	やや軟 やや劣	— —	1-k区出土	
		高杯	[13.2] (3.2) —	淡灰色 淡灰色 淡灰色	緻密/ほとんどなし/1(0.5)■/白(石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 やや劣	1/8 —	1-i区出土、内面は自然釉によって黒灰色化	
		高杯	[11.2] (3.7) —	灰～青灰色 暗灰色 淡灰～暗灰色	緻密/少/3(1)■/黒(多)・白(石)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬良	極小 —	1-j区出土、内面は自然釉で黒灰色化	
		高杯	— (3.4) —	灰白色 灰白色 灰白色	やや粗/ほとんどなし/1(0.5)■/黒・白(長)	・回転ナデ ・回転ナデか	硬良	— —	1-j区出土	

遺構名ほか	種別	器種	法量(cm) (:推定(:)残高 口径 器高 底脚径	色調		胎土 素質/鉱物の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・外面 ・内面	焼成 硬度 遺存 状態	残存 度 口縁 底脚	備考
				外 面 断 面	内 面 断 面					
中世包含層	須恵器	70	高杯 — (3.1) —	濃灰色 灰色 濃灰～灰色		緻密/少/3(1)■/白(石・ 長)・チ	・回転ナデ、回転ヘラケズリ ・回転ナデ、ナデ	硬 良	— 極小	1-k区出 土
		71	高杯 — (3.4) [7.0]	暗灰色 暗灰色 淡青灰色		やや粗/少/2(1)■/白 (石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 やや劣	— —	1-j区出 土
		72	高杯 — (10.7) —	淡紫灰色 青灰色 赤灰紫色		緻密/少/6(1)■/白(長・ 石)	・回転ナデ、カキメ ・回転ナデ、ナデ	硬 良	— —	1-j区出 土、脚外面 は自然 釉で暗灰 色化
		73	甌 [11.2] (20.0) —	淡青灰色 淡青灰色 淡灰褐色		緻密/少/2(0.5)■/白 (石)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/9	1-j区出 土、内面に 暗茶灰色自 然釉付着
		74	台脚部 — (3.4) [10.3]	濃灰色 青灰色 灰色		やや粗/少/3(0.5)■/白 (長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	— —	1-j区出 土、外面の 一部は自然 釉で暗灰色 化、脚付臺 か
		75	広口壺 — (4.0) —	淡灰～淡青灰色 淡灰～淡青灰色 淡灰～淡青灰色		緻密/少/2(0.5)■/白 (石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	— —	1-j区出 土、内面は 自然釉で暗 灰色化
		76	器台 — (3.3) —	淡灰色 淡灰色 灰白色		緻密/少/3(1)■/白(石・ 長)・黒・赤・チ	・回転ナデ ・回転ナデ	やや軟 良	— —	1-j区出 土
		77	甕 [34.2] (5.4) —	淡灰色 淡灰色 淡灰～灰色		やや粗/少/3(0.5)■/白 (石)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/6 —	1-j区出 土、預外面 の一部は自 然釉で黒灰 色化
瓦器		78	椀 [16.6] (4.3) —	黒色 黒色 灰白色		やや粗/ほとんどなし/2 (0.5)■/長・チ	・ナデか、ヘラミガキ ・ヘラミガキ	軟 劣	1/8 —	1-d区出 土
		79	皿 [10.1] (1.6) —	黒色 黒色 灰白色		緻密/少/2(0.5)■/チ	・ナデか ・ヘラミガキか	硬 劣	1/9 —	1-k区出 土
		80	椀 — (1.9) [8.8]	黒色 黒灰色 灰白色		やや粗/ほとんどなし/1(0.5)■/石	・ナデ、ヘラミガキ ・ミガキ	硬 やや劣	— 1/8	1-k区出 土
		81	椀 — (0.9) [4.0]	黒色 黒色 灰白色		やや粗/1(0.5)■/黒	・不明 ・ナデ	硬 劣	— 1/3	1-k区出 土
土製品		82	土錘 (長 5.9) (幅 3.9) (重 g)	淡明赤褐色 淡明赤褐色 淡明赤褐色		やや粗/少/5(1)■/長・ 赤・チ	・ナデか ・ナデか	硬 劣	— —	1-k区出 土
		石製品	83	砥石 (長 5.9) (幅 3.9) (厚 2.5)	褐灰色 — 褐灰色					— —
84	剥片 (長 3.5) (幅 1.4) (厚 0.4)		灰色 灰色 黒色					— —	1-k区出 土、サヌカ イト製	
土師器		85	小皿 [7.3] (1.4) —	淡灰白褐色 淡灰白褐色 淡灰白褐色		やや粗/少/2(0.5)■/チ	・ナデか ・ナデか	硬 劣	1/4 —	2-g区出 土

遺構名ほか	種類	図・図版番号	器種	法量(cm) ()推定()残高 口径 器高 底脚径	色調 外内面 断面	胎土 素質/鉱物等の量/鉱物等の 粒度(※)/鉱物等の種類 (※※)	調整・手法 ・外内面	焼成度 遺存状態	残存度 口縁 底脚	備考	
											調整・手法 ・外内面
中世包含層	土師器		86	小皿	[8.0] (1.0) —	淡褐色 淡褐色 淡褐色	緻密/少/1(0.5)■/石・ チ	・ナデ、ヨコナデか ・ナデ、ヨコナデか	やや軟 やや劣	1/6 —	2-g 区出 土
			87	小皿	[7.7] (1.6) [5.8]	淡橙褐色 淡橙褐色 淡橙褐色	緻密/少/1(0.5)■/長・ 赤	・ナデか ・ナデか	やや軟 やや劣	1/11 —	2-i 区出 土
			88	小皿	[8.4] (1.4) —	淡橙褐色 淡橙褐色 淡橙褐色	緻密/少/2(0.5)■/長・ チ	・ナデか ・ナデか	軟 劣	1/5 —	2-i 区出 土
			89	高杯	— (3.2) —	淡灰茶褐色 淡灰茶褐色 淡灰茶褐色	やや粗/少/2(0.5)■/赤	・ヘラケズリ ・ナデか	硬 劣	— —	2-h 区出 土
	須恵器		90	杯蓋	[11.8] (2.8) —	灰色 灰色 灰色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)■/白・石・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	極小 —	2-i 区出 土
			91	杯B蓋	[8.8] (1.4) —	青灰色 青灰色 淡青灰色	やや粗/やや多/3(1)■/ 黒・白・(長)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/5 —	2-c 区出 土
			92	杯B蓋	— (1.5) —	淡青灰色 淡青灰色 灰白色	緻密/少/3(0.5)■/白 (長)・黒	・回転ナデ ・ヘラオコシ痕	硬 良	— —	2-b 区出 土、上面に 灰白色自然 釉付着
			93	杯	[9.1] (1.6) —	青灰色 青灰色 暗灰色	緻密/少/3(0.5)■/白 (石)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	極小 —	2-i 区出 土
			94	杯	[12.3] (2.7) —	青灰色 青灰色 灰茶色	緻密/少/2(0.5)■/白 (石)	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/7 —	2-b 区出 土、体外面 に灰白色自然 釉付着
			95	杯	[12.8] (2.6) —	淡青灰色 淡青灰色 灰赤紫色	緻密/少/1(0.5)■/白 (石)・赤	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	1/8 —	2-i 区出 土
	瓦器		96	高杯	— (1.7) —	暗青灰色 青灰色 赤灰茶色	緻密/ほとんどなし/1 (0.5)■/白	・回転ナデ ・回転ナデか	硬 良	— —	2-a 区出 土、内面に 緑褐色自然 釉付着
			97	器台	— (4.4) —	淡青灰色 淡青灰色 淡青灰色	緻密/少/2(0.5)■/白 (長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデか	硬 良	— —	2-a 区出 土、外面は 自然釉で暗 灰色化
			98	甕	— (7.7) —	暗灰色 暗灰色 淡青灰色	緻密/少/3(0.5)■/白 (石・長)・黒	・回転ナデ ・回転ナデ	硬 良	— —	2-k 区出 土
99			椀	— (3.1) —	黒灰色 黒灰色 灰白色	緻密/少/1(0.5)■/黒	・ナデ、指圧痕 ・ナデ、ヘラミガキ	硬 劣	極小 —	2-a 区出 土	
瓦質土器		100	椀	— (1.4) [7.2]	黒色 灰白色 灰白色	緻密/少/2(0.5)■/チ・ 石	・ナデか ・不明	やや軟 劣	— —	2-b 区出 土	
		101	椀	— (6.9) [4.8]	黒色 黒灰色 灰白色	緻密/少/2(0.5)■/チ	・ナデ ・不明	やや軟 劣	— —	2-i 区出 土	
		102	小皿	[6.8] (0.7) —	黒灰色 黒灰色 灰白色	やや粗/少/2(0.5)■/長・ チ	・不明 ・不明	やや軟 劣	1/4 —	2-b 区出 土	
		103	釜	[17.6] (5.2) —	黒灰色 黒灰色 灰白色	やや粗/少/3(0.5)■/チ・ 長	・ヨコナデ、ナデ ・ヨコナデ	やや軟 劣	極小 —	2-h 区出 土	

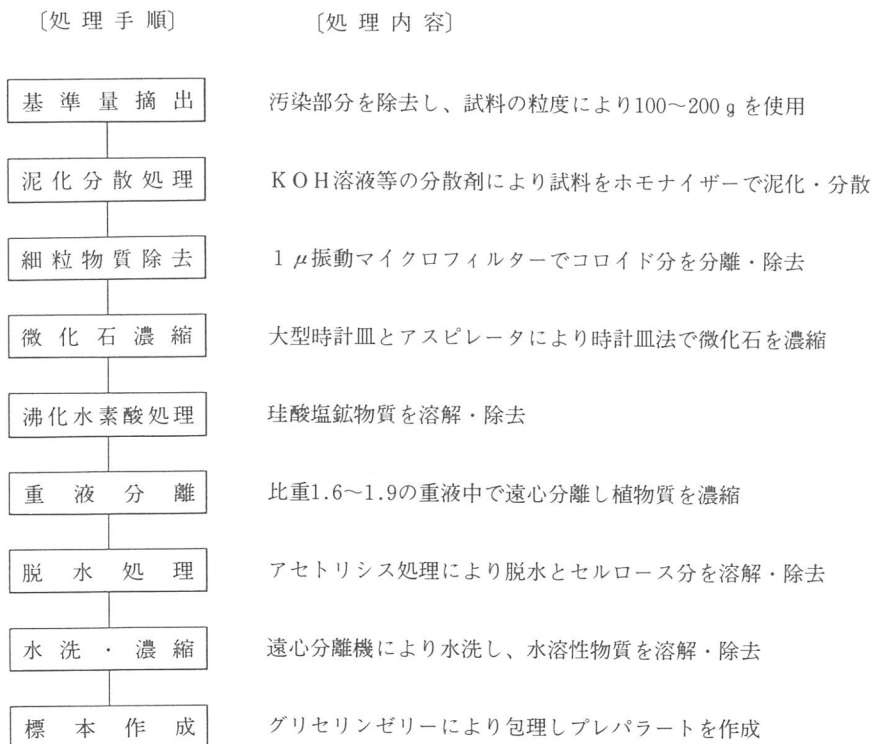
それぞれの地点の土層図および試料採取層準を、第21・22図の花粉ダイアグラム中に示す。ただし、第1-i区北半（西壁）の試料No.⑥⑦からは花粉化石がまったく検出できなかったために、花粉ダイアグラムには示していない。

3 分析方法および分析結果

分析方法を第20図のフローチャートに示す。また花粉分析結果を、第21・22図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、木本花粉、草本花粉について百分率で表した。また花粉含有量が少なく木本花粉検定数が40に満たなかった試料では、出現した花粉化石の種類を*で示した。前述のように、第1-i区北半（西壁）試料No.⑥⑦からは、花粉化石が検出できなかったために、花粉ダイアグラムを示していない。

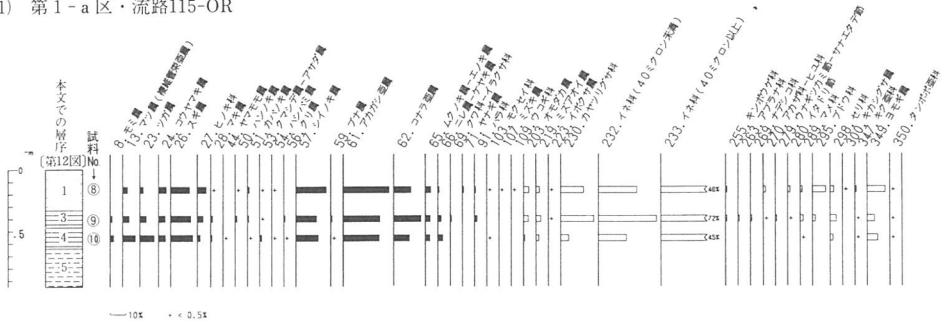
4 花粉組成の特徴および花粉分帯

第2-a区西端北壁試料No.③ではアカガシ亜属が69%の高率で出現する。一方他の試料では、アカガシ亜属は30%程度の出現率を示すのみであり、スギ属、シノキ属、コナラ

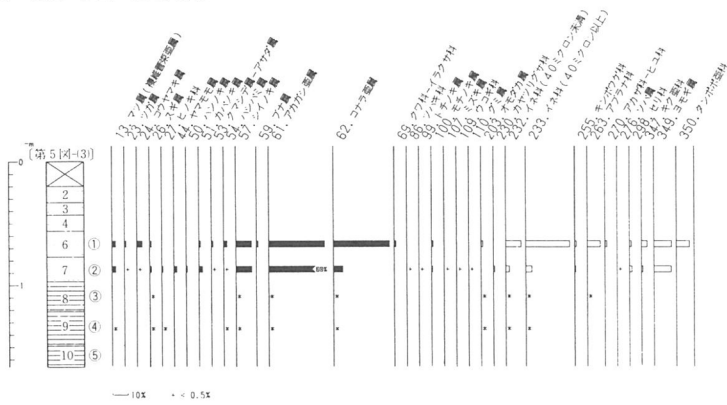


第20図 花粉分析フローチャート

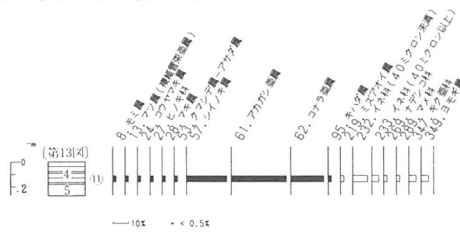
(1) 第1-a区・流路115-OR



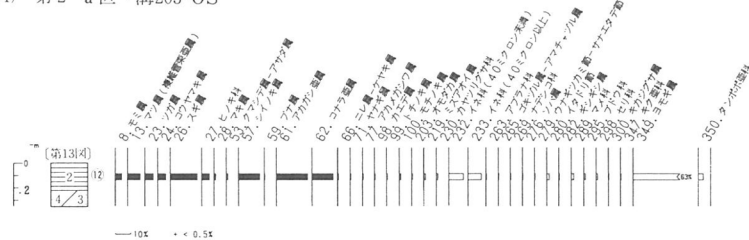
(2) 第2-a区・西端北端



(3) 第2-a区・溝202-OS

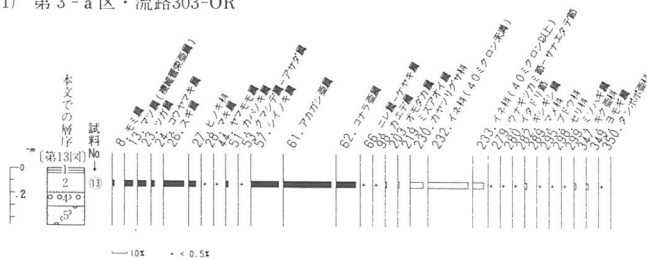


(4) 第2-a区・溝203-OS

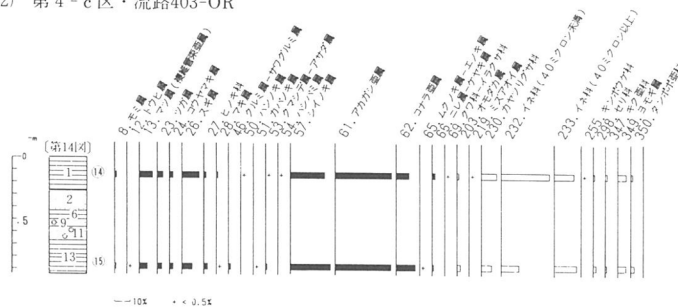


第21図 花粉ダイアグラム-1

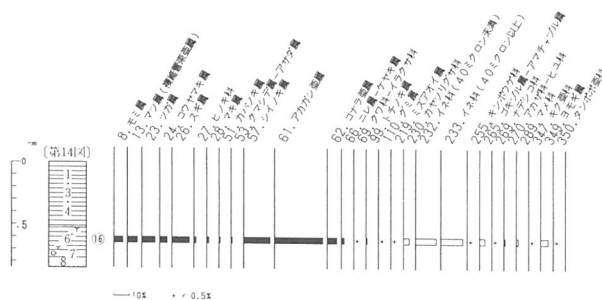
(1) 第3-a区・流路303-OR



(2) 第4-c区・流路403-OR



(3) 第4-f区・流路406-OR



第22図 花粉ダイアグラム-2

亜属が20%程度、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などが数%出現する。

今回の分析試料は、縄文時代晩期から中世にかけての堆積物と考えられているが、ほとんどの試料で花粉組成に大きな差がなかったことから、今回は花粉分帯を行わなかった。

5 古植生変遷

花粉分析結果から、以下のように古植生を推定した。また花粉化石から母植物の種は決定できないが、現在の植生から推定し、できる限り種名で表した。

(1) 森林植生

第2-a区を除く遺跡周辺の丘陵や、和泉山地の山麓には、カシ類やシイノキ属を要素

とする照葉樹林が分布していたと考えられる。和泉山地山腹から山頂にかけては、スギ、モミ、ツガ、コウヤマキ、ヒノキなどの針葉樹を要素とし、カバノキ科の諸属や、カシ類、ナラ類などの広葉樹を伴う中間温帯林が、山頂にはブナを要素とし、ナラ類やカバノキ属を伴う冷温帯林が分布していたと考えられる。第2-a区西端北壁試料No.③では、アカガシ亜属が高率となり他の花粉化石がほとんど検出されないことから、試料No.③層準の堆積時期に第2-a区西端北壁付近でのみ、カシ類が高密度となっていた可能性がある。

(2) 農耕について

イネ科（40ミクロン以上）の出現率が高いことから、弥生時代中期～古墳時代後期に第1-a区（流路115-OR）を中心に稲作が行われていた可能性が指摘できる。今後、プラント・オパール分析の実施、発掘調査等により稲作の確認がなされることであろう。

また、第2-a区溝203-OSからはソバ属が検出されており、縄文時代晩期から弥生時代前期にソバが栽培されていた可能性がある。このほかいくつかの試料でマメ科が検出されているが、栽培と結びつく形態のものではなかった。

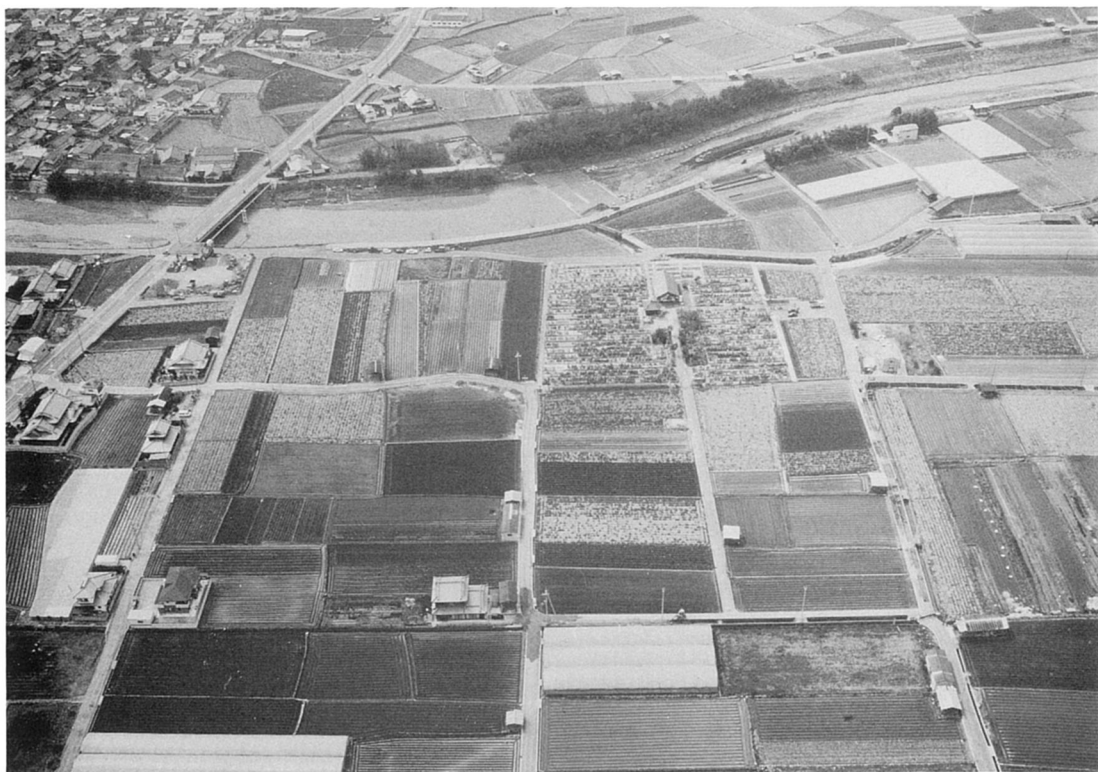
6 まとめ

三軒屋遺跡において行った分析から、以下のことを考察した。

- (1) 分析を行った試料について、花粉組成に優位な差が認められなかった。
- (2) 花粉組成をもとに古植生を推定したが、縄文時代晩期～中世にかけて、顕著な植生の変化は認められなかった。
- (3) 第1-a区（流路115-OR）付近では、弥生時代中期～古墳時代後期に稲作を行った可能性がある。今後、プラント・オパール分析の実施、発掘調査等により稲作の確認が必要である。
- (4) 第2-a区西端北壁試料No.③は、他の試料と異なる花粉組成の特徴を示し、局地的な植生を表すと考えられる。

図

版



(1) 調査地全景(航空写真・東から)



(2) 調査地全景(北北西から)



(1) 第1区調査前風景(北から)



(2) 第2区調査前風景(西から)



(3) 第3区調査前風景(南から)



(4) 第4区調査前風景(東から)



(1) 第1区全景(南から)



(2) 第1区全景(北から)



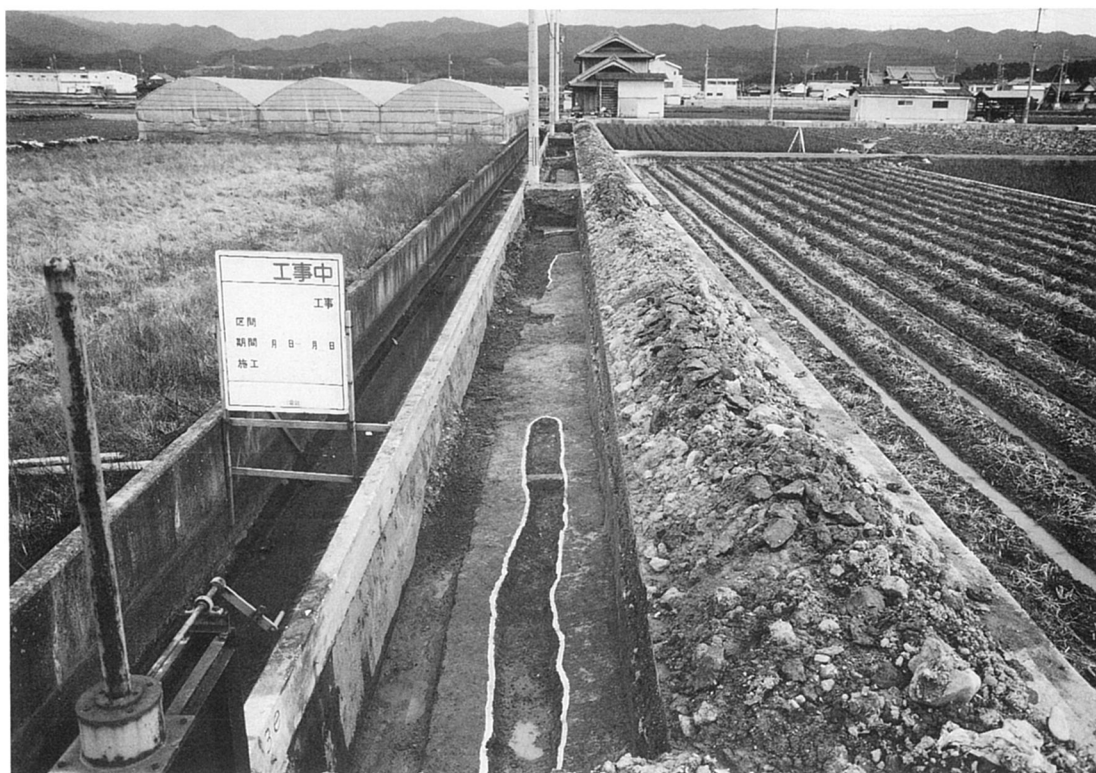
(1) 第2区全景(西から)



(2) 第2区全景(東から)



(1) 第3区全景(南から)



(2) 第3区全景(北から)



(1) 第4区全景(東から)



(2) 第4区全景(西から)



(1) 第1-a・b区：流路115-OR(南東から)



(2) 第1-j区：落ち込み状遺構108-OX(南から)



(1) 第1-k区：溝113・114-OS(北西から)



(2) 第2-a区：溝202～204OS(西から)



(1) 第2-e区：溝206-OS・土壇208-00ほか(南西から)



(2) 第2-g区：土壇213-00ほか(東から)



(1) 第3-c区：流路302-OR(北から)



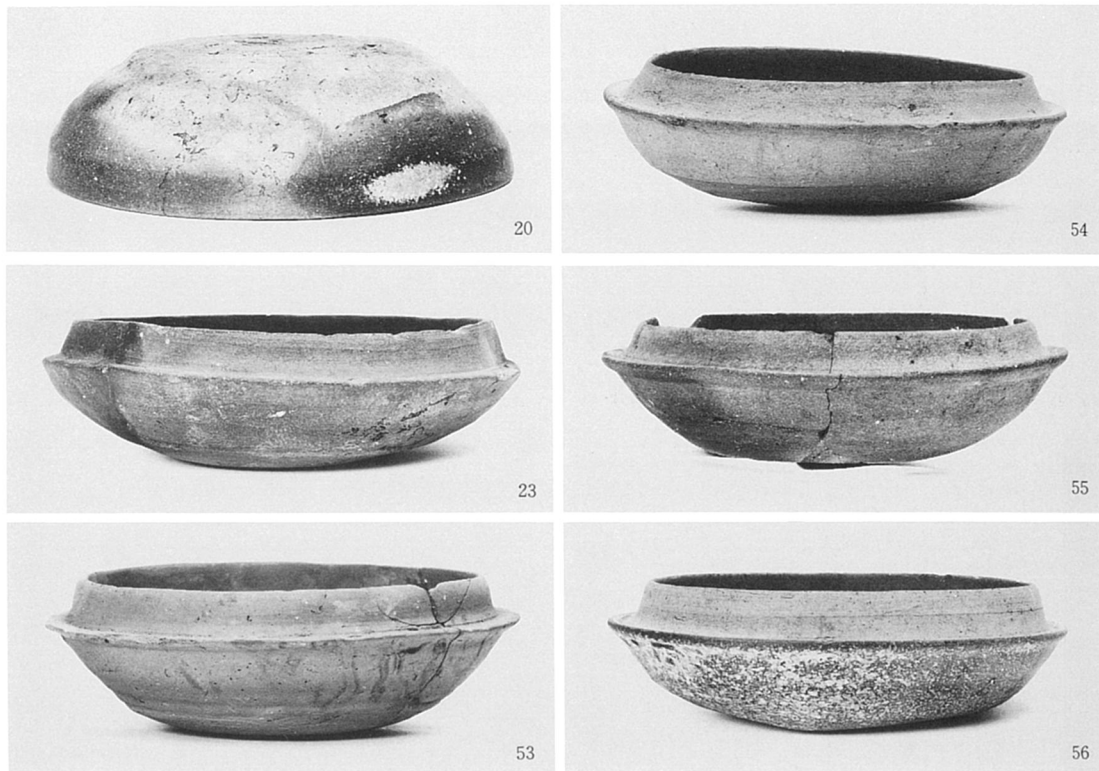
(2) 第4-c区：流路403-OR(西から)



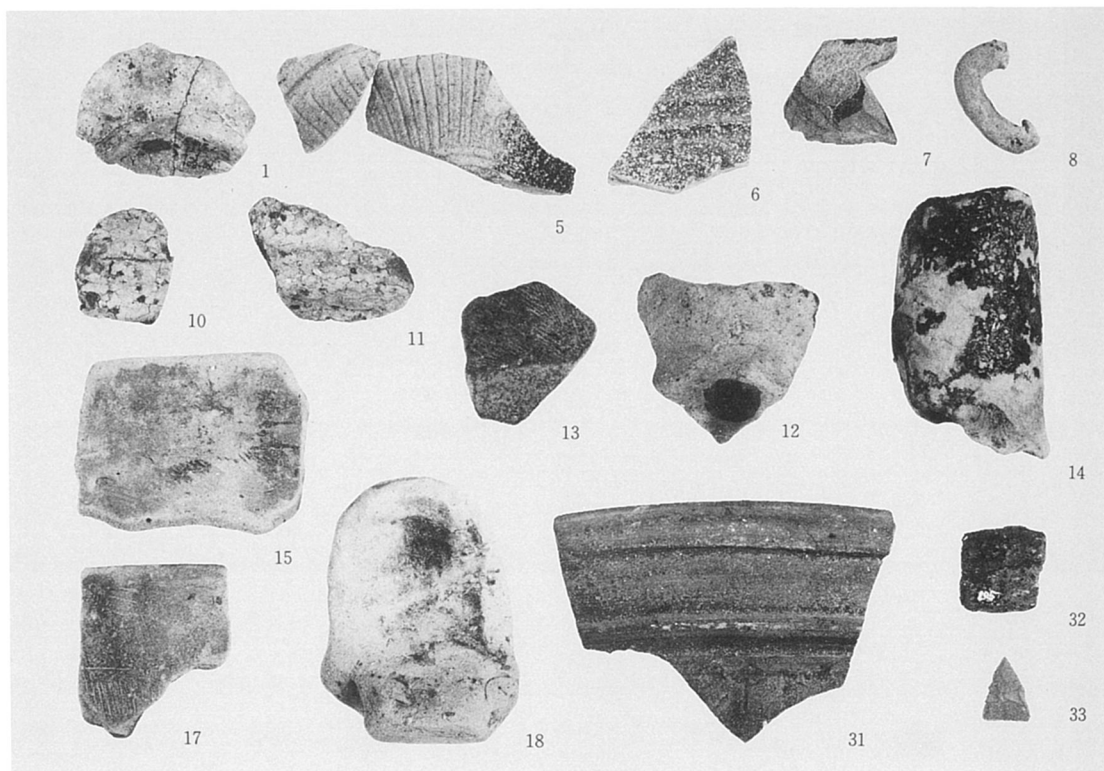
(1) 第4-c区：流路403-OR調査風景(東から)



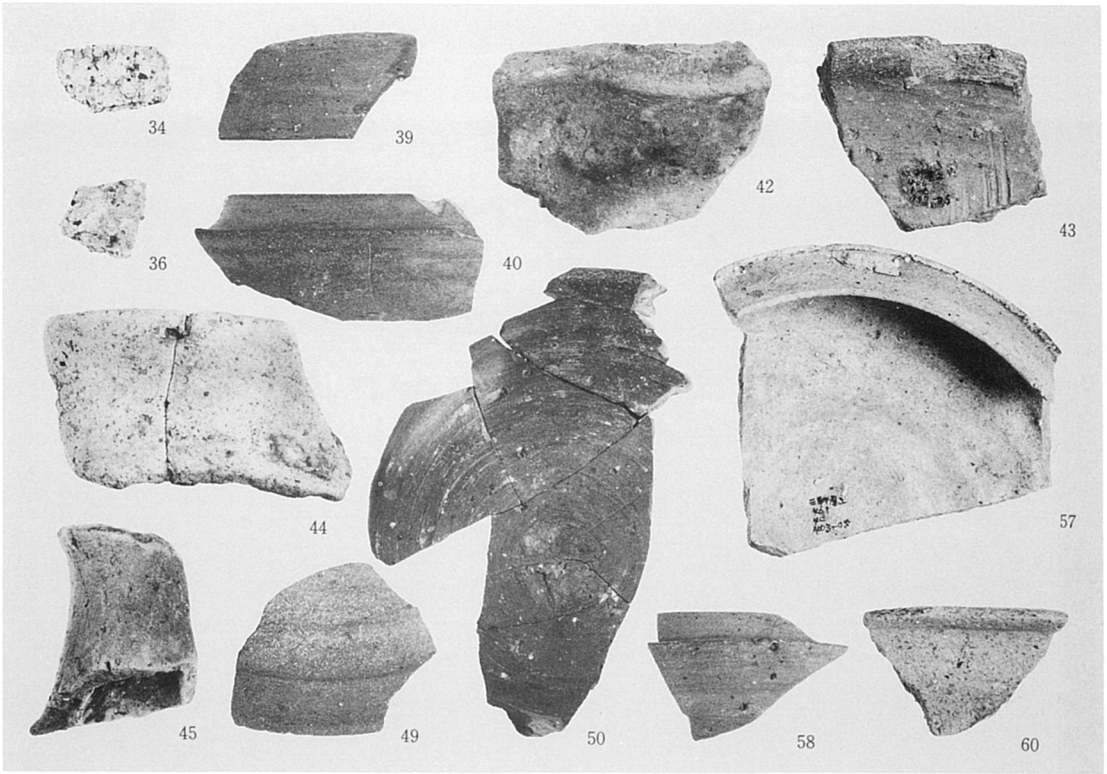
(2) 第4-c区：流路403-OR遺物出土状況(東から)



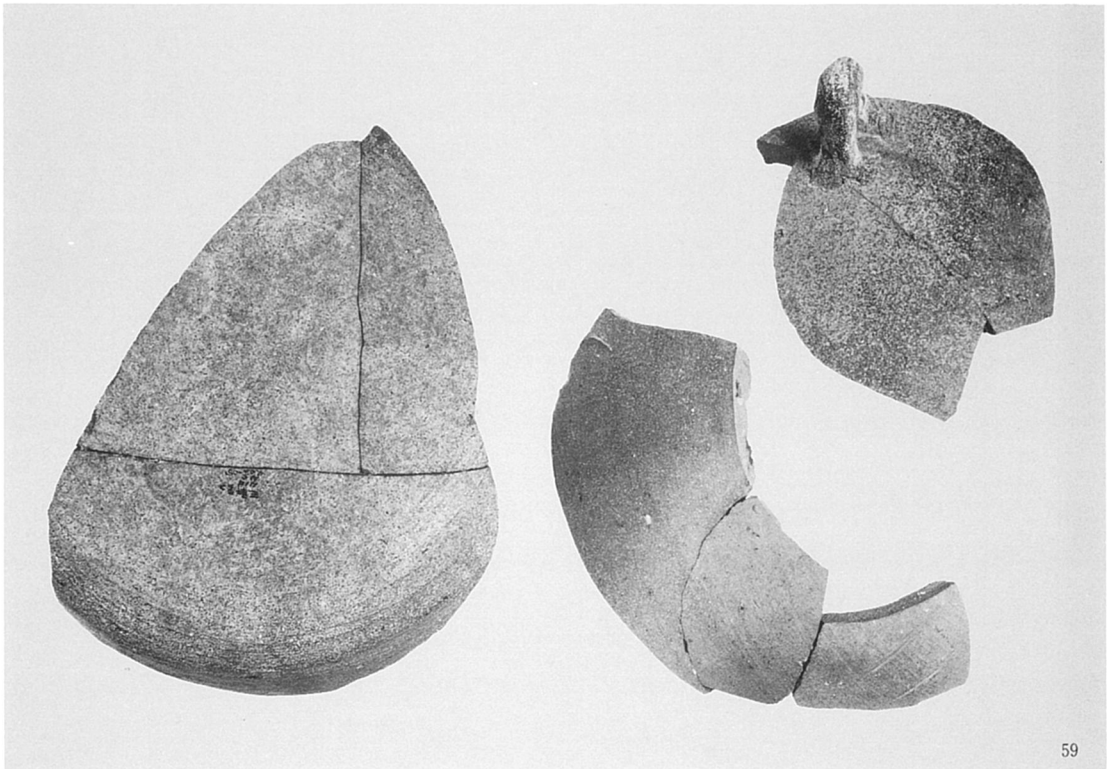
(1) 第1・第4区遺構出土遺物 115-OR(20・23) 403-OR(53-56)



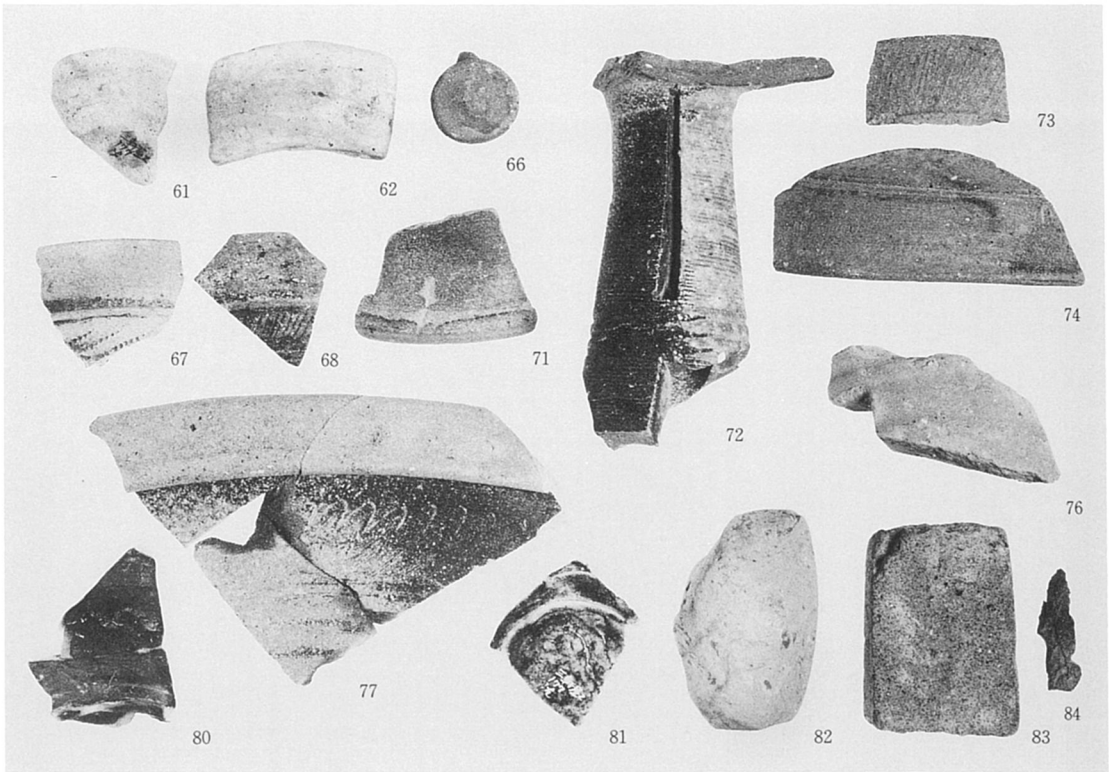
(2) 第1区遺構出土遺物 108-OX(1・5~7) 102-OO(8) 113-OS(10・11)
115-OR(12~15・17・18・31) 111-OX(32・33)



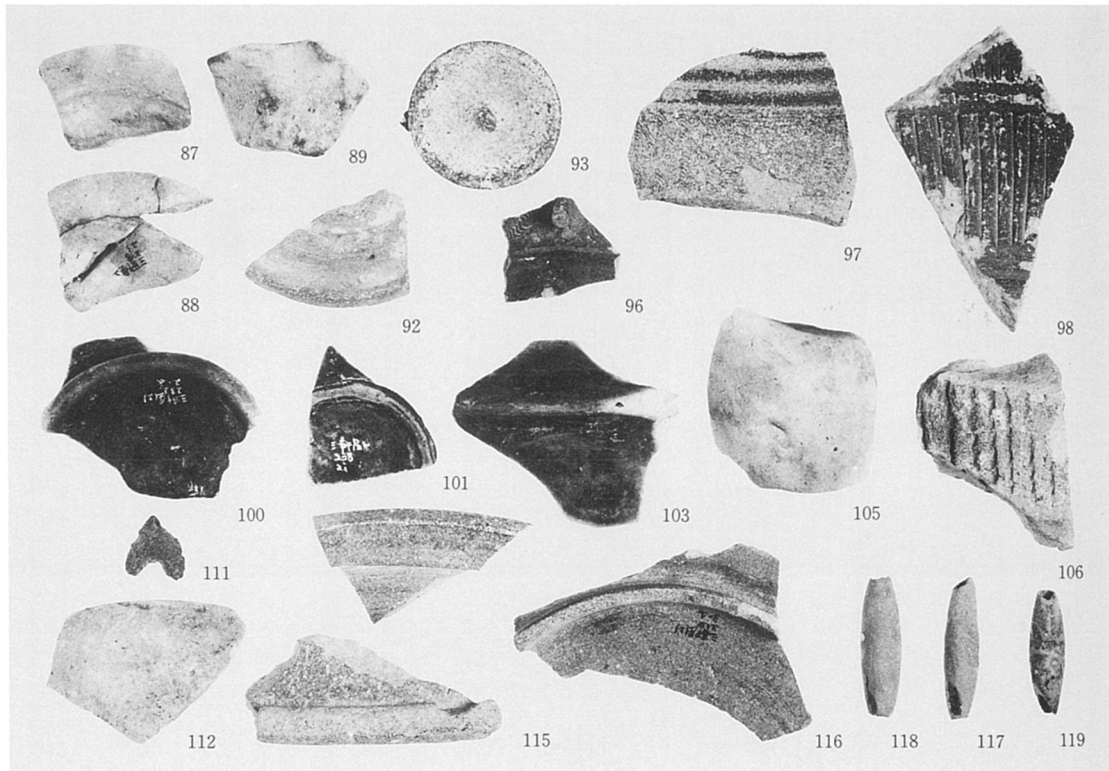
(1) 第2～第4区遺構出土遺物 202-OS (34) 203-OS (36) 303-OR (39・40) 401-OR (42・43)
403-OR (44・45・49・50・57・58) 406-OR (60)



(2) 第4区遺構出土遺物 403-OR (59)



(1) 第1区中世包含層出土遺物



(2) 第2・第3区中世包含層・各区その他出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	さんげんやいせき II
書名	三軒屋遺跡 II
副書名	府営水質障害対策事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書
シリーズ番号	第87輯
編著者名	秋山浩三
編集機関	(財)大阪府埋蔵文化財協会
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区谷町2-2-20 大手前ウサミビル5F TEL 06-942-3885
発行年月日	1994年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんげんやいせき 三軒屋遺跡	おおさかいづみきのし 大阪府泉佐野市 ながたき 長滝ほか	27213	—	34度 22分 40秒	135度 18分 50秒	19931101) 19940325	約416	府営水質障害対策事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三軒屋遺跡	集落	縄文晩期～ 弥生前期	溝 3条 流路 3条 落ち込み状遺構 3基他	縄文土器(長原式)・弥生土器(前期・中期)・須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・土錘・石鏃・搔器・サヌカイト剥片・砥石・平瓦	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文晩期～弥生前期、古墳中・後期の集落北端の様相判明 ・縄文晩期長原式と弥生前期(新段階)の遺構や遺物が混在して分布
		古墳中～後期	溝 3条 流路 1条 土塚 1条 落ち込み状遺構 2基他		
		中世	溝 7条 土塚 4条 落ち込み状遺構 7基他		
		近世	流路 2条他		

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第87輯

三軒屋遺跡 II

府営水質障害対策事業に伴う発掘調査報告書

平成6年10月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 ©

〒540 大阪市中央区谷町2-2-20 大手前ウサミビル5F

TEL:06-942-3885

印刷・製本 中島弘文堂印刷所